黒　田　館　跡

1984・3

松江市土地開発公社
松江市教育委員会

凡　　例

1. 本書は、松江市教育委員会が（財）松江市土地開発公社の委託を受け、昭和58年度において総事業費 6, 400 千円により実施した黒田館跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、松江市教育委員会社会教育課文化係主事中尾秀信が担当し、同係主事岡崎雄二郎、同係指導員錦織慶樹、調査員秦誠司、遠藤浩己、作業員佐々木稔、山脇幸人、浦田和彦、瀬古諒子、丹羽野輝子らがこれを補佐した。
3. 発掘調査にあたっては、県文化課及び山本清氏の助言指導を得た。
4. 本書の編集は、主として中尾が行った。
5. Ⅳ　文献史料からみた黒田館跡　については調査員遠藤浩己氏から原稿を賜わった。
6. 遺物、図面の整理、浄書にあたっては、桑原真治、柘源和子がこれを行った。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 3
Ⅱ　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 6
　1. 従前の調査 …… 6
　　(1) 昭和37年の調査 …… 6
　　(2) 昭和57年度の調査 …… 6
　2. 昭和58年度の調査 …… 8
　　(1) 遺　　構 …… 8
　　(2) 遺　　物 …… 17
Ⅳ　文献史料からみた黒田館跡 …… 31
Ⅴ　小　　結 …… 35

第１図　遺跡の位置図

Ⅰ　調査に至る経緯

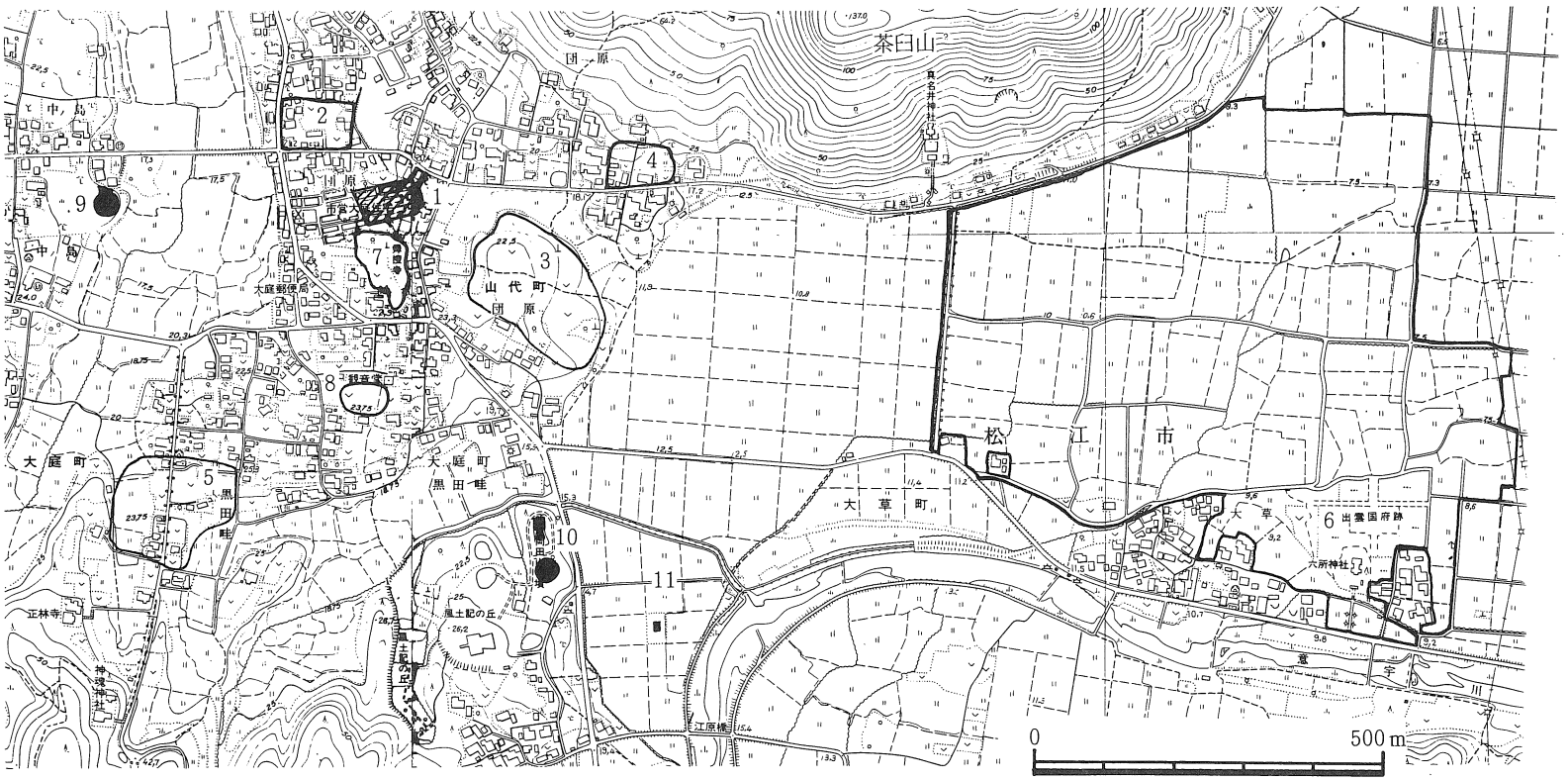
黒田館跡は、松江市山代町329－1番地に所在する。昭和37年1月、当時の山代町字下黒田において市営住宅の建設に伴い、舜<ruby>叟<rt>しゅんそう</rt></ruby>寺裏の竹林を伐開して整地を行おうとした際、土塁らしきものが発見された。これがこの館跡の初見で、この当時は南側とその両側に続く二辺の一部、及び北辺の一部分の土塁が残っていたと記載されている[①]。この後、昭和58年に市営住宅の大規模な建て替え工事が行われるのに伴い、県教育委員会文化課において昭和57年11月から昭和58年2月まで試掘調査を行い、多くの柱穴と周濠らしき溝状遺構を確認した[②]のでこの取扱いについて県文化課、市建築課、市社会教育課の三者により協議を行った。この結果、造成工事の委託を受けた松江市土地開発公社の負担により市社会教育課において発掘調査を実施することとなった。調査は昭和58年5月9日から同年9月3日までの約4カ月を要した。1辺8mのグリッドを設定し地山の加工状況を観察記録しながら遺構の検出に努め、調査の初期段階で早くも多数の柱穴と濠が認められた。この為に当初の調査計画に大幅な遅延を生じ、また土壌がかなり硬化していたため、土砂の排除作業にも困難をきたした。

Ⅱ　遺跡の立地と周囲の環境

松江市の南郊、大庭町を中心とした大草、竹矢、山代、佐草町等は、縄文時代の往古から人々が生活を営んできた。縄文、弥生遺跡は竹矢小学校校庭遺跡、才塚遺跡、布田遺跡があり、縄文前期から弥生後期に至る石器、土器の出土がある[③]。

古墳の密度も他の地域と比較して顕著である。「向山西第2号墳」[④]、「井の奥第4号墳」[⑤]などの古墳時代中期の前方後方墳や前方後円墳と共に「石屋古墳」[⑥]、「井ノ奥1号墳」、「大庭鶏塚」[⑦]の大型方墳、後期には「岡田山古墳」[⑧]、「山代方墳」[⑨]、「古天神古墳」[⑩]、「岩屋後古墳」[⑪]や「安部谷横穴群」[⑫]、「十王免横穴群」[⑬]、「狐谷横穴群」[⑭]等数多く集中している。8世紀代には、出雲国庁[⑮]がおかれたことが「風土記」に記載され、出雲国分寺[⑯]、同国分尼寺跡[⑰]も発見されている。さらに本遺跡の近郊には、山代郷正倉跡がある。

本遺跡は、昭和35年（1960）9月、恩田清氏によって大庭町の山代町との境に接した字長者原地区一帯の20アールのほぼ長方形となる畑地、宅地から多くの焼米が発見され、立地条件からも正倉の所在地としてふさわしく出雲国風土記記載の里程ともほぼ合致することからこの地域に正倉



第2図　周辺の遺跡分布図

1黒田館跡　2山代郷正倉跡　3小無田遺跡　4四王寺跡・山代南新造院跡推定地　5出雲国造館跡推定地　6史跡出雲国府跡　7遺物散布地　8遺物散布地　9東淵寺古墳(前方後円墳)　10岡田山古墳群　11岩屋後古墳(墳形不明)

跡が推定されるに至った。

その後、昭和54年（1979）10月に至り、民間業者により遺跡を含む一帯が宅地とするための造成工事が開始されたことが判明し、工事を中止してもらう一方、発掘調査について業者と県、市三者の協議が数度もたれた。

その結果、昭和54年11月５日から12月末日まで、県市、合同の調査に着手し正倉の建物をほのめかす総柱づくりの高床建築物２棟他、建物跡７棟を検出し、正倉跡であるとの結論が出された。

その後、昭和56年度まで３次にわたり、周辺一帯の発掘調査が実施され正倉跡計４棟を検出し、昭和55年12月５日付けで国の史跡に指定された。

県教委では、その中心部3,519㎡について土地買上を実施し、昭和58年度において環境整備事業を行った。

正倉跡の調査で、これまでに確認された遺構は古墳時代の住居跡とみられる遺構から、新しくは中世に至るまでの建物群を含むが、この内奈良時代のものと推定されるＡ期とした遺構は、掘立柱建物跡７棟、柵列１条である。

これらは、いずれも方形あるいは隅丸方形の大型の掘り形をもち、建物の主軸方位は、Ｎ－10°－Ｅ前後の方向になる。

建物は、３棟が側柱のみをもつもの、４棟が総柱建物の倉庫と考えられるもので、丘陵のほぼ中央部にＳＢ０４とＳＢ０８を配し、その中軸線から東へ102尺（30.3ｍ）隔てた南北線上に倉庫３棟、反対側の西へ101尺（30ｍ）隔てた場所にも倉庫（ＳＢ１３）を置いている。

このように奈良期の建物は、その方向、間隔等非常に計画的に配置されていることがわかる。

３次にわたる調査では、これら建物群を区画する明確な遺構は検出されなかったが、建物の広がりと地形から判断すれば、ほぼ１町四方に及ぶものと考えられる。

このように一定の地域に大規模な建物群が、短期間の内に極めて計画的に配置されたことは、官衛跡のように公的な性格の強い建物群であり、さらに倉庫付近から多量の炭化米が出土していることは、官立の穀倉であった可能性が強い。

ところで天平５年（733）に勘造された「出雲国風土記」の意宇郡の条には、「山代郷郡家西北三里一百廿歩。所造天下大神大穴持命御子山代日子命坐。故云山代也。即有正倉。」とあり、出雲国庁跡と同所にあった意宇郡家からの方位、里程を計算すれば、ちょうどこの調査区に近い場所に山代郷庁があったことになり、正倉も郷庁の近辺に設置されていたものと考えられることから、本遺跡で検出された倉庫群を主体とする奈良時代の遺構は山代郷の正倉に十分比定しうるものといえる。⑱

Ⅲ　調査の概要

1. 従前の調査

(1) 昭和37年の調査

松江市が、昭和36年度大庭第１、第２市営住宅を建設中、たまたま現地を訪れた恩田清氏（当時松江市耕地課勤務）によって土塁らしきものが発見され、松江市教育委員会へ通報があった。そこで翌19日、同委員会の林勉主事と島根県立博物館学芸員の近藤正氏が現地踏査して館跡であることを確認された。

その後、山本清（島大教授）、池田満雄（南高教諭）、林主事、近藤正学芸員の４名で遺構の測量や土塁の一部試掘を実施して、不完全ながら記録にとられた。所在地籍は、松江市山代町岡・小門328番地である。

土塁は、南辺とその両側に続く東西の二辺の一部、及び北辺のごく一部分だけである。

土塁の規模は、外縁で東西が約44.8～44.6ｍ、南北が48.0～47.6ｍを計る。土塁の幅は、南辺で約4.6ｍ、東西両辺の南端では4.2ｍ、北辺では約５ｍを計る。高さは南辺で1.5ｍ、西辺で１ｍ、東及び北辺で約50㎝を計る。土塁は殆んど盛り土で構築している。

空濠は、南辺及び西、北両辺の一部に認められる。南辺で幅約４ｍを示し、深さは1.5～1.0ｍ前後ある。

出土遺物は土師質皿片10、陶質壷片１、須恵質壷片１、摺鉢片１、磁器質碗片１、青磁片１、青銅製筒形品１、銭貨３である。

この内、摺鉢片は備前焼で南北朝～室町時代のものと比定される。

また、銭貨は宋銭で室町時代頃の経塚から発見されることが多い。

土師質皿も、同様の時代のものである。これらのことから館跡の構築及び存続年代は、おおまかに南北朝時代から室町時代初期の頃と推定される。⑲

(2) 昭和57年度の調査

風土記の丘地内の主要な遺跡の概要を把握するため、島根県教委が昭和57年11月から昭和58年２月まで発掘調査を実施した。

その結果、第１調査区では段状遺構１、溝状遺構１、柱穴約100個が検出された。溝状遺構は、上端幅3.1ｍ、下端幅2.7ｍ、深さ0.25ｍあまりのもの。土師質土器、陶磁器類、砥石など多数の遺物が出土した。

第２調査区では、段状の落ち込み１、溝状遺構１、土坑４、柱穴約60個の遺構を確認。この内、溝状遺構は幅1.８ｍ、深さ0.４ｍあまりのものである。土坑は長さ2.２ｍ、幅1.２ｍを計る。須恵器、土師質土器、陶磁器類など多数の遺物が出土している。

第３調査区

明確な遺構は検出できなかった。

第４調査区

南北方向に走る溝状遺構とその中央部で土坑１個が検出された。溝状遺構は上端幅60㎝、下端幅30㎝、深さ30㎝あまりのものである。土坑は一辺約1.８ｍの方形のもので深さは約１ｍある。内部から備前焼の摺鉢が出土した。他に５個あまりの柱穴が確認された。

第５調査区

東西方向に走る溝状遺構（ＳＤ０１）が検出された。上端幅約1.８ｍ、下端幅約0.９ｍ、深さ約1.３ｍを計り、内部に須恵器、土師質土器、陶器があった。

他に14個の柱穴が確認され、その内４個は建物跡（ＳＢ０１）のコーナーと推定されるもので南北の柱間は 195 ㎝、東西の柱間は 180 ㎝を計る。

第６調査区

２つの土坑を検出した。１つは1.６×1.３ｍの長方形のもので深さは20㎝あまりある。他の土拡は一辺約１ｍ、深さ10㎝の方形のもの。

第７調査区

14個の柱穴を確認。この内３個は、建物跡となるもので柱間は 240 ㎝を計る。

須恵器、土師質土器、陶磁器類が出土している。

小　　結

(1) 字岡地区

１、２、５、８の各調査区で検出されたとおり、溝や柱穴など多数の遺構が遺存していた。特に柱穴の重複状態や出土遺物から考えると、古代から中近世にかけて建て替えられていることがわかった。

溝や段状の遺構は、かつて存在した土塁の方向と一致することから、両者は密接な関係にあったものと推定される。また、出土遺物の中に中国製の青磁などがあることから中世の館跡は、かなりの有力者の館であったことがうかがわれる。

(2) 字小門地区

第４調査区で知られるように、明確に中世遺構の存在することが明らかになった。

(3) 字内屋敷地区

正倉跡の正南の位置にあたり、大規模な柱穴は確認されていないが、調査区の周辺に建物跡のあった可能性が高い。⑳

2. 昭和58年度の調査

大庭市営住宅地のうち、昭和58年度にかかる新しい宅地の造成部分は、宅地面積約4,950㎡の部分であった。調査は、この地区全域を8×8ｍのグリッドによって分割し、工事計画に合わせて北側進入路付近より開始することとした。ここは県教委が先に行った調査で、第5調査区と呼称した地点で当初これに合わせてグリッドを設定したが、のちの調査区画とは異なったためにこの北東部入口付近を大きく第Ⅰ調査区と呼ぶこととした。他の地域では、北側擁壁にそったグリッドのうち4ｍ×2ｍの区域を一つの調査区とし、東側よりⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区とした。また残りの南側部分も東側よりそれぞれⅤ区、Ⅵ区、Ⅶ区と呼ぶこととした。また、調査地全域は県の発掘成果により、地山からの表土高が推定出来たので、地山面より約20～30㎝上面まで大型機械により表土排除作業を行った。

(1) 遺　　構

第Ⅰ調査区

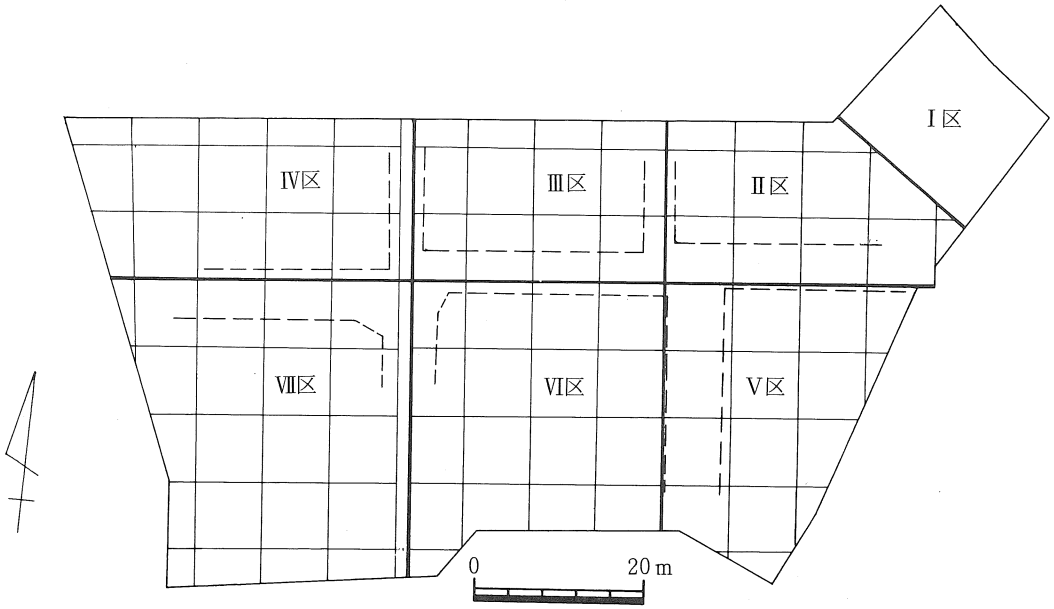
市営住宅地の北東部の進入道路と旧住宅1棟を含む区域である。現地表面下より60～70㎝で地山面に達した。北側の県道八重垣神社竹矢線より1ｍほど宅地内に入り、これに平行に上端幅1.5ｍ～2.1ｍ、下端幅0.3～0.6ｍの溝状遺構（ＳＤ01）が検出された。深さは上端面より0.9～1.1ｍを測る。この溝内には、上端面より0.2～0.6ｍの間の黒褐色土層に7～20㎝大の多数の石群と土師器片、須恵器片、磁器片、瓦片が遺存していた。また、この調査区だけで200カ所以上のピットが検出されたが、いずれも径20～30㎝、深さ10㎝前後のものである。　そのうち特に径が大きく、根石らしきものが検出されるもの、及び深さと形状のしっかりした20穴ほどを検討した結果、2棟の建物（ＳＢ01、ＳＢ02）と柵列（ＳＡ01）が推定されるに至った。

この他、長方形、楕円形の土拡が4つ認められたが、これらはⅠ区の東側に集中している。いずれも遺物は検出されなかった。

①　ＳＢ01

東西3間以上、南北3間の建物である。

ＳＤ01より1ｍ南側によった部分で東西柱間3～4ｍ、南北柱間5～8ｍで東西の棟行は不明である。柱穴は径約60～90㎝、深さ60㎝でほぼ一定しており、そのうち3つのピットから根石らしいこぶし大の石が置かれているのが検出された。



第3図　調査区設定図

② **ＳＢ０２**

東西３間以上、南北１間の建物である。

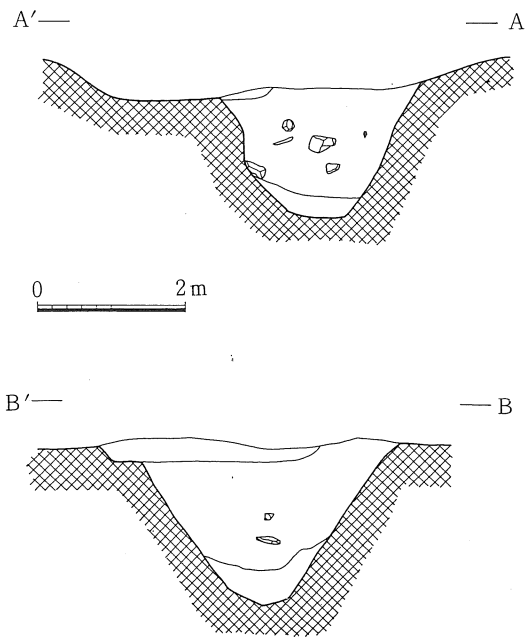
ＳＤ０１に隣接し、ＳＢ０１の東柱列より1.5ｍ東によった地点で、南北幅4.5ｍと思われるが、東西方向へは7.5ｍ以上の広がりをもつ建物であると推定される。各ピット径は40～60㎝、深さ47～55㎝を測り、南西隅柱穴は二段に掘り込まれている。

③ **ＳＡ－０１**

ＳＢ０１の北側、ピット列に沿い、0.2ｍほど北によって3.3ｍ間隔の３つのピットが検出された。ＳＢ０１とは距離的に接近しすぎているので、時期的に同一のものとは言いがたいが柵列とみてまちがいないように思われる。

第Ⅱ調査区

第Ⅰ調査区に隣接した区域で８×８グリッド８区画、及び２ｍ×20ｍのグリッドよりなる。ここでも第Ⅰ調査区と同密度でピットが検出され、その数は100カ所以上になるものと思われる。また大型の土坑も15カ所で検出された他、ＳＤ－０１に折れまがって続く方向で同様の溝状遺構（ＳＤ－０２）が検出された。このＳＤ－０２は第Ⅲ調査区から第Ⅳ調査区に至り、東に直角に曲がることを確認した。また、この調査区ではこれらのピットから建物２棟（ＳＢ－０３、ＳＢ－０４）と柵列（ＳＡ－０２、ＳＡ－０３）及び井戸（ＳＥ－０２）をほぼ確認した。ＳＤ



第4図　SD01断面図

－02は上端幅1.6～2.0m、下端幅0.4～0.85m、深さ0.9～1.3mを測る。この溝内にもSD－01と同様深さ20～65cmで石列が発見され、土師器、須恵器、鉄製品が発見されている。

土坑状の掘形は調査区全域で検出されたが、特にSB－03を中心とした西側に多い。この内、SK－19は南北長3.4m、東西長1.7m、深さ33cmの長方形で、白磁皿片、かわらけ、須恵器片が出土している。SK－23は長径1.3m、短径0.4m、深さ0.6mの土坑であるが、底部に長1m、径10cmの木片が遺存していた。また、SK－28は上端径約5m、深さ1.5mの大型土坑であるが、土坑上端面で石群が認められた他は土坑底部に至るまで何ら遺物は認められなかった。

SB－03

東西1間、南北5間の建物である。

第Ⅱ調査区の南側でSD－02より東に7m、調査区南西隅に向かって南北12m、東西3.2m、南西隅より1.8mの地点で、東に1.6m、西に1.8mの張り出しを設けた長方形の建物と思われる。柱穴は都合16穴であるが、西側柱穴列のうちの1穴は確認出来なかった。いずれも径40～60cm、深さ20～50cmのピットである。この周辺には大型の土坑と旧宅地の基礎コンクリートが入り込み、地山面が相当にかく乱されているので他に建物を推定出来なかった。

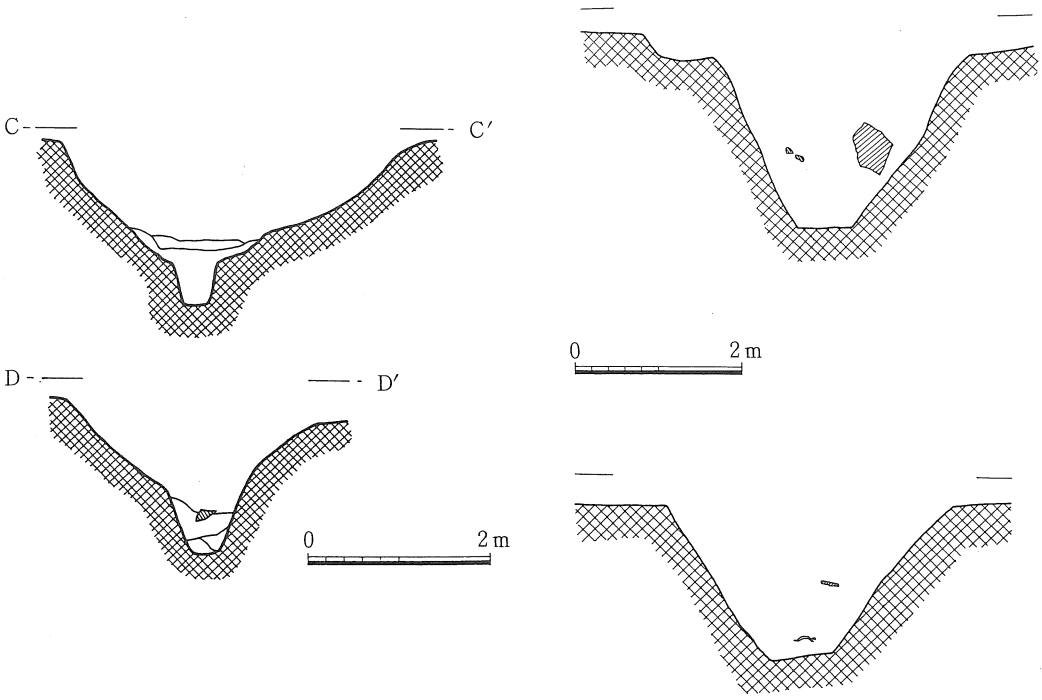
SB－04

東西2間、南北3間の建物である。

第Ⅱ調査区の南東側、SB－03より10m東に寄った地点にあり、南北棟行6.2m、東西間9mを測る建物と思われるが、南東隅は旧宅地の水道管の埋没によるかく乱により削平されて確認出来なかった。SB－03及びSD－02とはほぼ平行に位置するが、SB－01及びSB－02とはやや角度を異にする。SD－01とSD－02の角度の相異に端を発していると思われる。

SA－02

SB01より南に3.6mの地点でSB01と平行に5つの柱穴が検出された。柱穴は3～4mの間であるがピットは径約50cm、深さ50cmでほぼ一定しており、SB－01に付随する柵列と推



第5図　ＳＤ０２断面図

定した。

ＳＡ－０３

ＳＢ－０３より東へ１ｍ、ＳＢ－０３と平行に東西にのびる５つの柱穴を認めた。柵列と推定される。ピットは径40～60cm、深さ70～90cmを測る。

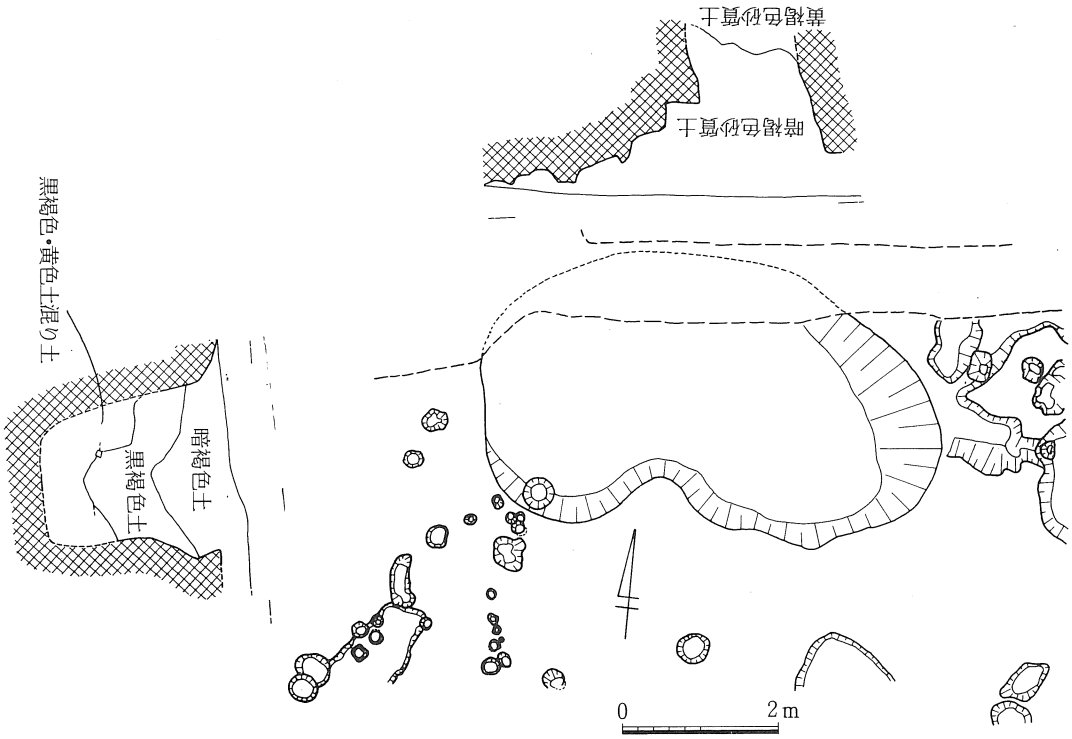
ＳＥ－０２

ＳＢ－０３の北側にあって、ＳＤ－０２より東に３～５ｍの場所にある。楕円形の不定形であるが、掘形底部より石群が多数検出され、陶磁器、土師器が黒褐色土層中より出土したことから石積のある井戸であった可能性もある。東西径５ｍ、南北径推定3.２ｍ、深さ1.９ｍを測る。北側は旧住宅の基礎コンクリートにより上端部を削平されており、底部の掘形もこのコンクリート壁が落下する恐れがあったので一部分確認したのみである。

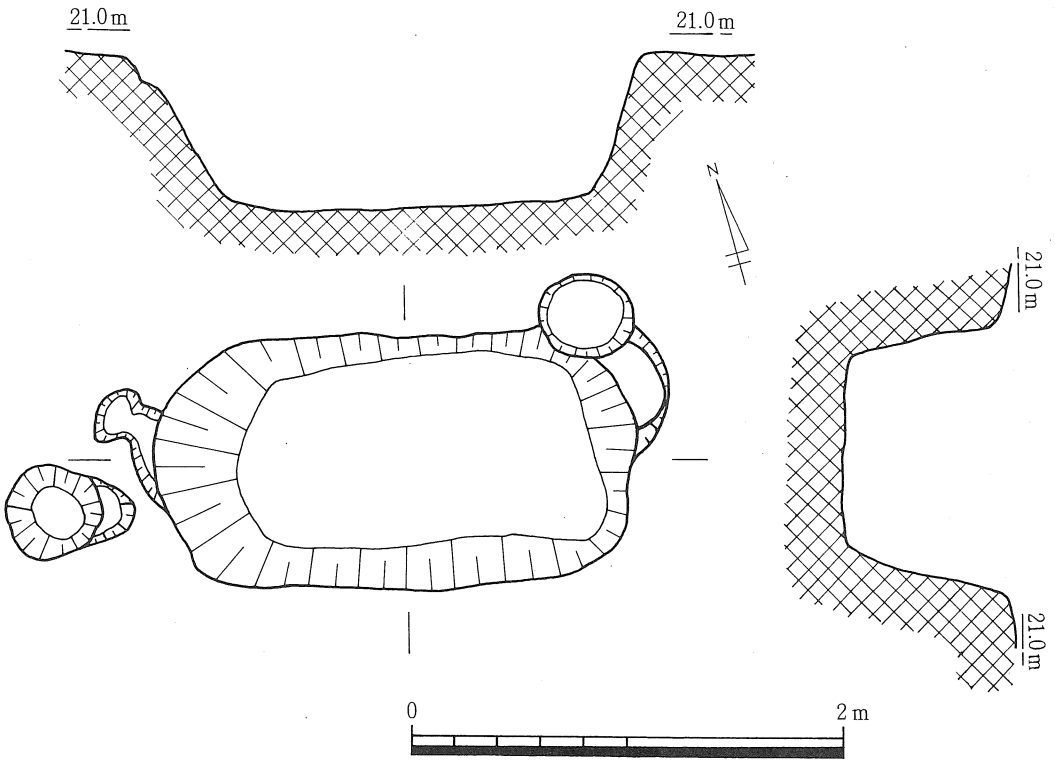
第Ⅲ調査区

第Ⅱ調査区の西側に位置し、８×８グリッド８区画、及び20ｍ×２ｍグリッド１を含む。この調査区は、旧宅地の建設時点で北側半分がほぼ全域にわたり削平されており、削平されていないＳＤ－０２の西側部分では、ピット状の遺構密度が極端に減少する。

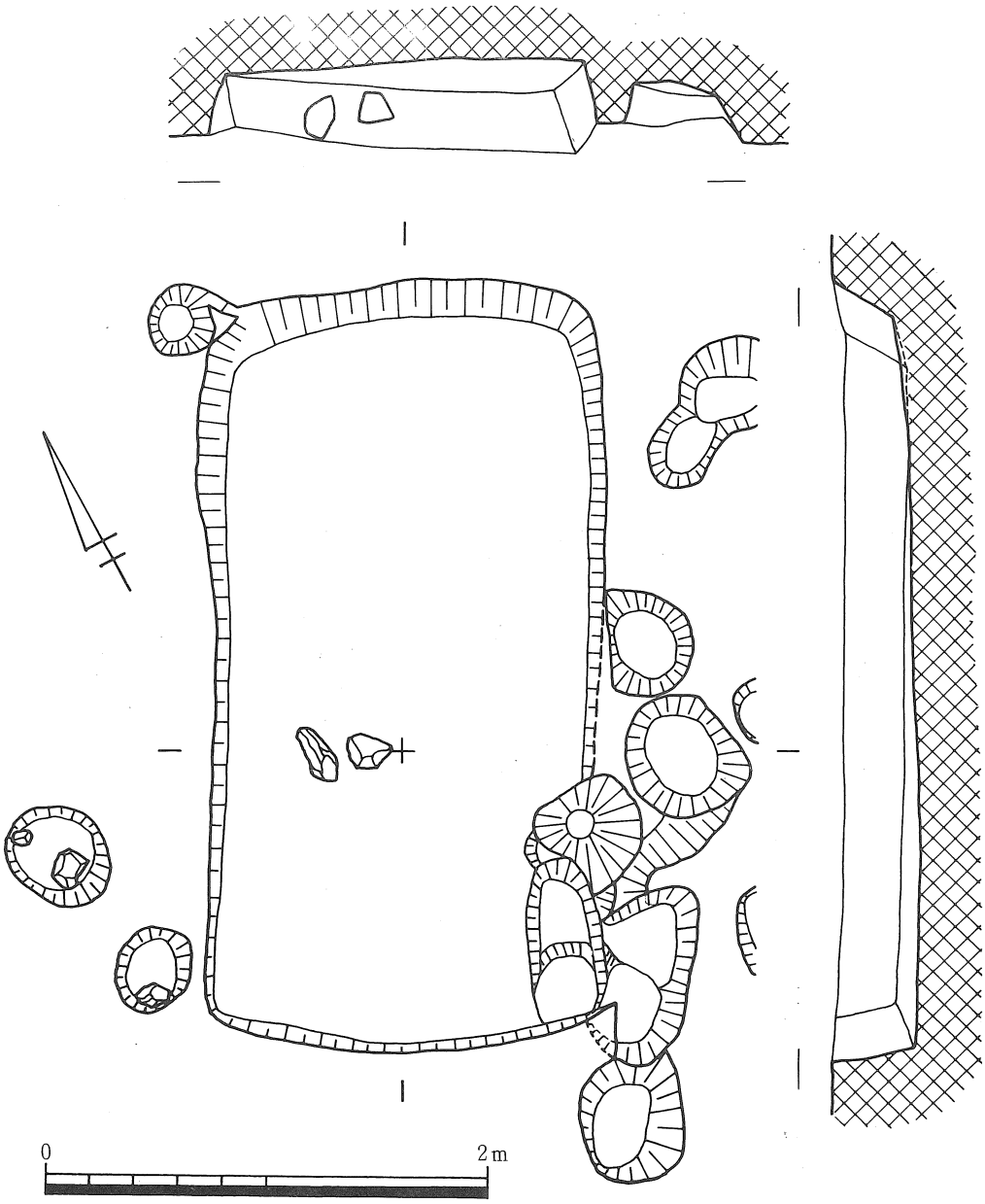
Ⅲ区に属するＳＤ－０２内においても、両隅に至って石列が確認された。Ⅱ区よりのびたＳＤ－０２はⅢ区に至り旧宅地の基礎によって一部削平されているが、さらに南にのびて第Ⅳ調査区



第6図　ＳＥ０２実測図



第7図　ＳＫ０８実測図

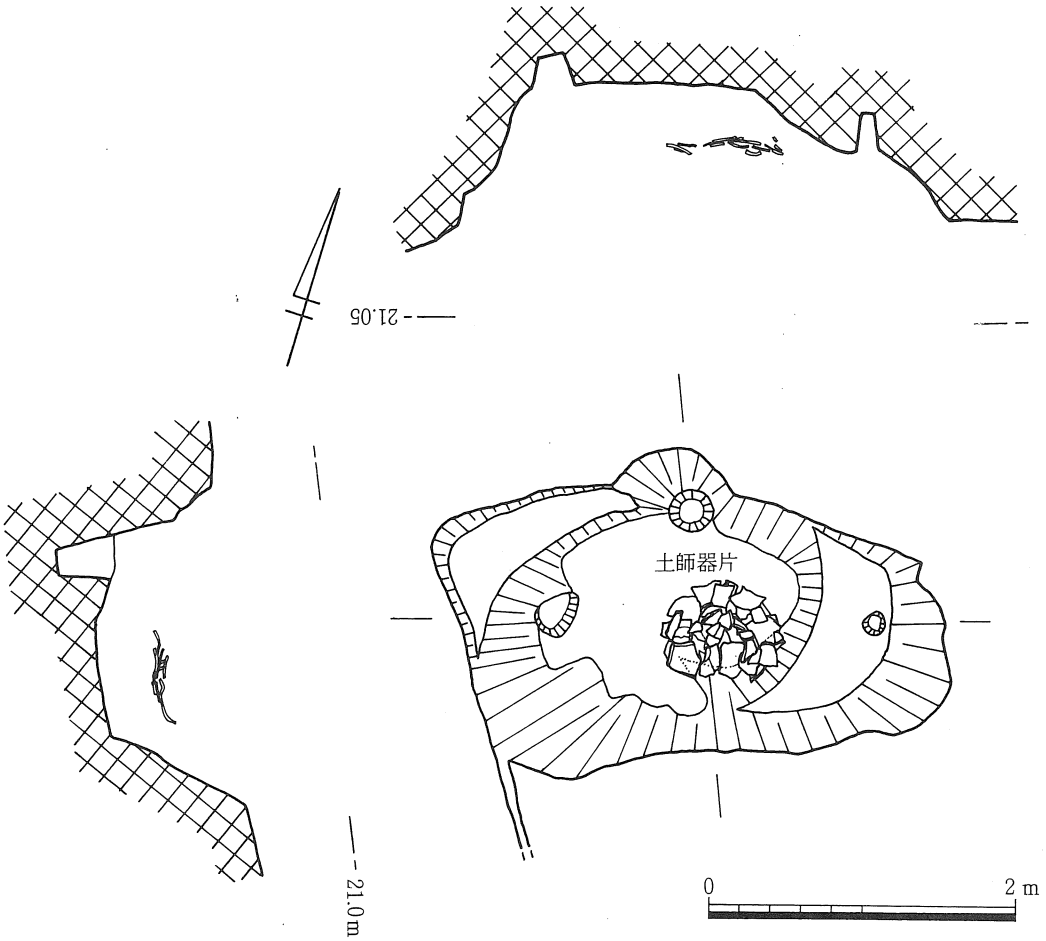


第8図　ＳＫ１９実測図

につらなっている。

ＳＫ－２７

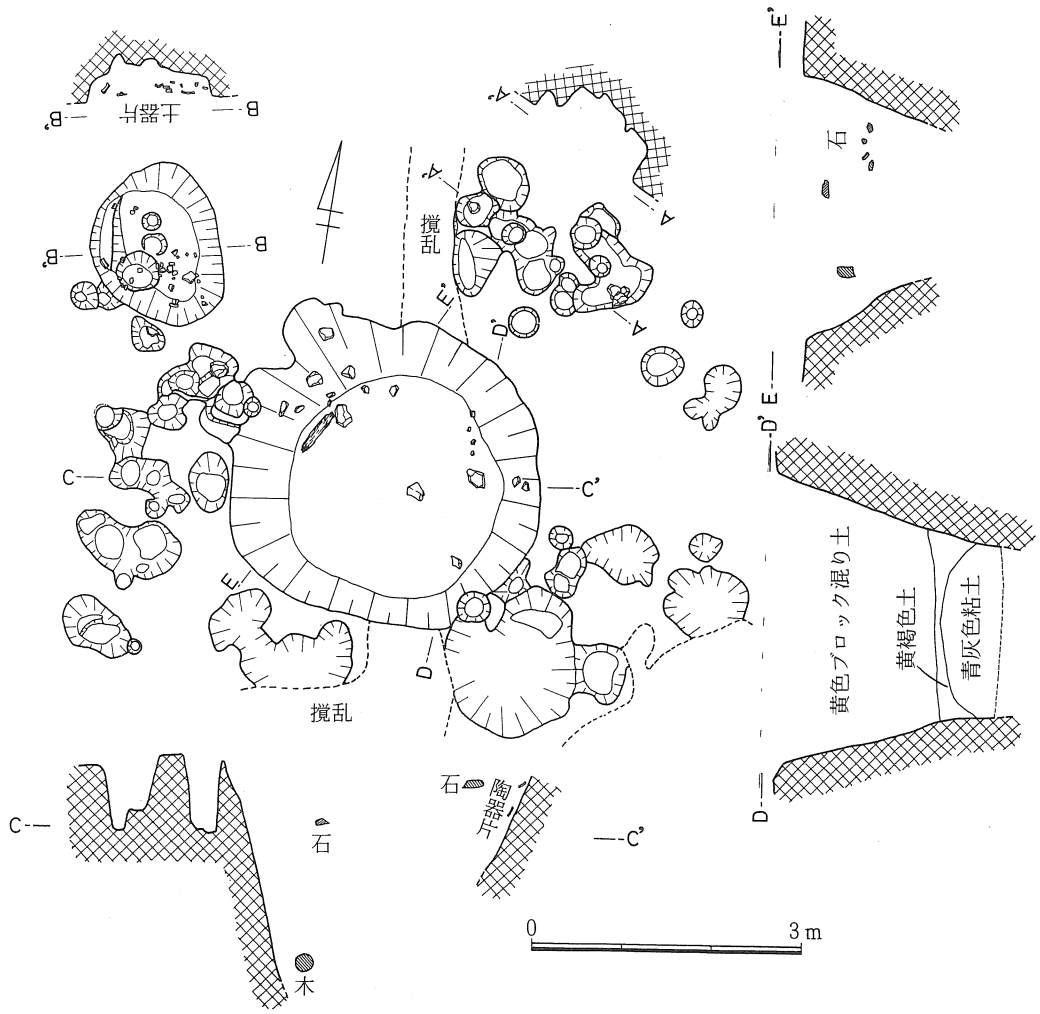
第Ⅲ区南東隅にあり、長径 175 ㎝、短径90㎝、深さ40㎝を測る土坑であるが、この中からほぼ完形に近い形で土師質の壷が検出された。



第９図　ＳＫ２７実測図

第Ⅳ調査区

第Ⅲ調査区の西側より宅地西端までを含む地域であるが、第Ⅲ区と同様地山面は北側よう壁部分より３ｍほどを残して住宅基礎形成の際に削りとられている。本調査区では２本の溝状遺構が検出された（ＳＤ－０３、ＳＤ－０４）。ＳＤ－０３は上端幅2.7ｍ、下端幅２ｍ、深さ70cmを測り、ＳＤ０１、ＳＤ０２に比してかなり大型の溝である。また、ＳＤ－０４はＳＤ－０３よりやや小さく、ＳＤ－０３より７ｍの西方に位置し、上端幅2.6ｍ、深さ10cmを測る。ＳＤ０４からは、遺物は検出されなかったので館跡に関係するものか判断は出来なかった。この他、ＳＤ－０３より西側に40cmのところで150 cmの大型ピットが検出されたが、これは底部確認の時点で多量の湧水と共に機械油状の浮遊物が認められたので調査を打ち切った。



第10図　ＳＥ０１実測図

第Ⅴ調査区

第Ⅱ調査区の南東側に位置する。この区画も宅地基礎のため削平がはなはだしく、100カ所以上のピット状遺構が検出されたにもかかわらず、かなりはっきりした掘形をもつ井戸状の土坑（ＳＥ－０１）が検出された他は、建物として推定出来うるピットはなかった。

ＳＥ－０１

ＳＢ－０４より南へ約７ｍほどのところにあり、径2.4ｍ、深さ2.0ｍ以上を測る。掘形上端より石群が入り込み、これは上層の黄色ブロック混り土層中に土師器、磁器片とともに検出された。下層である青灰色粘土層に至り、遺物、石群ともなくなるが、下部より長さ60㎝、径15㎝の木片が遺存していた。土坑の掘形がはっきりしており、大型でほぼ円形を成し、遺物を包含す

第1表　土　拡　一　覧　表

番号	規模 長径	規模 短径	規模 深さ	平面形	出土遺物	備考
SK03	210 × 170 × 30(cm)			楕円形		
SK05	200 × 160 × 30			楕円形	・須恵器(甕片) ・土師質土器(糸切底の坏など)	
SK06	400 × 360 × 20			楕円形	・須恵器(甕片、高台付坏など) ・土師器(壷) ・白磁青花碗　・とっ手 ・平瓦　・鉄滓	
SK08	220 × 120 × 70			長方形		
SK09	180 × 60 × 20			楕円形		
SK10	170 × 110 × 30			長方形	・須恵器(糸切底の坏) ・土師器(壷) ・土師質土器(糸切底の坏など)	
SK11	170 × 140 × 35			楕円形	・須恵器(高台付坏、瓩) ・土師器(壷)　・カマド(?)片 ・土師質土器(細片)　・土製支脚	
SK12	200 × 200 × 20			方　形	・須恵器(高台付坏?) ・土師器(壷) ・土師質土器(細片)	
SK13	180 × 120 × 15			楕円形	・土師質土器(糸切底の坏) ・鉄製品(釘など) ・炭化物	
SK14	120 × 80 × 50			長方形		
SK15	170 × 80 × 70			長方形		
SK16	130 × 50 × 50			楕円形		
SK18	540 × 230 × 20			長方形	・須恵器(甕片) ・土師質土器(細片)	
SK19	330 × 200 × 30			長方形	・須恵器(細片) ・肥前系磁器(18～19C) ・白磁青花(16C)	
SK20	190 × 60 × 30			長方形	・土師質土器(細片) ・青メノウ	
SK21	140 × 100 × 20			楕円形		
SK22	190 × 100 × 20			長方形	・須恵器片(甕片、糸切底の高台付坏) ・土師質土器(細片)	
SK26	180 × 180 × 30			円　形	・土師質土器(糸切底の坏など)	
SK28	450 × 450 × 150			円　形	・須恵器(甕片) ・土師質土器(糸切底の坏など) ・備前(甕片) ・鉄製品 ・炭化物	
SK29	160 × 80 ×不明			長方形	・土師質土器(細片)	
SK30	200 × 80 × 30			楕円形	・土師質土器(糸切底の坏)	
SK27	175 × 90 × 40			楕円形	・土師器(壷)	
SK23	100 × 40 × 50			長方形		計10cm、長さ1m以上の自然木が底にあり

るところからみて井戸と推定される。

第Ⅵ調査区

Ⅴ区西側、Ⅲ区南側にあたる20ｍ×20ｍの区域である。第Ⅲ区より続くＳＤ－０２がⅢ区南端より17ｍのところで東へほぼ直角に折れ曲がっている。Ⅵ区に至るとＳＤ－０２内の石列はほとんどなく、遺物も少量の土師器片が検出されるのみである。

本区もⅤ区と同様、かなりの地域で地山面が削平を受けているが、ＳＤ－０２に平行して１ｍほど東によった地点で東西長1.2ｍ、南北長2.4ｍの４つのピットが長方形に検出された（ＳＢ－０５）。ピットは径40㎝前後、深さ23～30㎝前後のものだが位置及び形状からみて門のような構造物ではなかったかと推定される。また、東に折れたＳＤ－０２の南端で北に1.3ｍの間隔をあけて３つの長方形の土拡が検出されたが（ＳＢ－０６）、これも塀あるいは柵の一部ではないかと思われる。これとは別にＳＤ－０２の角部より南西に5.5ｍほどの地点に幅約１ｍ、深さ20～80㎝、南北長８ｍの溝状遺構（ＳＤ－０５）が検出されたが、いずれの目的をもって掘り込まれたかさだかでない。

第Ⅶ調査区

第Ⅳ調査区の更に西側、宅地敷地の南西部にあたる。ここは旧住宅の取りこわしの際、すでに地山面が削平されており、大型の浄化槽も埋設されていた場所でほとんど遺構面は現存していなかった。

また、この後の住宅建設のための事前ボーリング調査の際、４×４ｍのグリッドをこの中央に設定して調査を行ったが、この時点でも土坑及び遺物とも皆無であった。

(2) 遺　　物

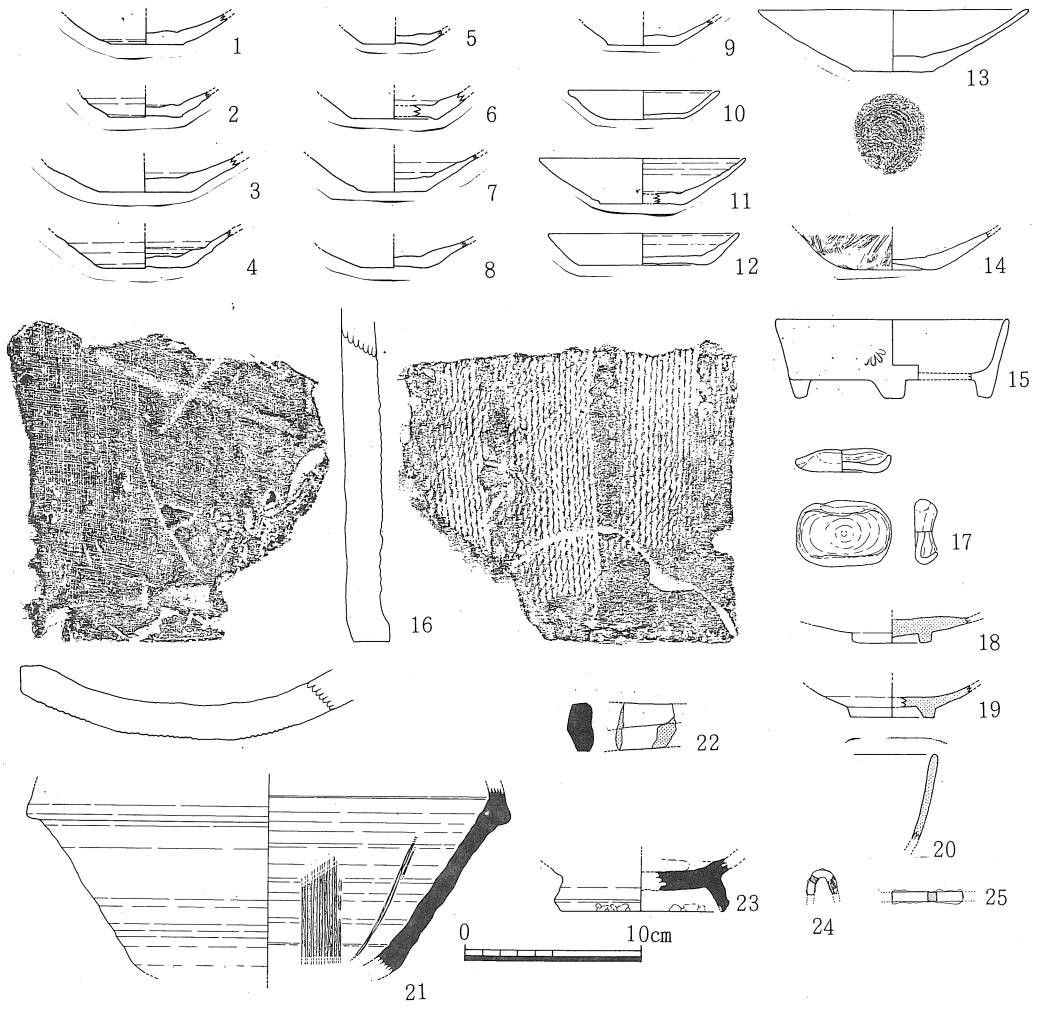
(ア) 須恵器

古墳時代のものは殆んど無い。蹟が２個体あるが、平底となる式のもので、７Ｃ末から８Ｃ前半頃にかけてのものであろう。（第16図25、26）高台付坏は殆んどが糸切底であるが、底部外面をナデて調整したものもあり７Ｃ中～８Ｃ前半項までのものである。（第16図21） 高台の付かない坏類は静止糸切りの底部を有するもので８～９Ｃ代のものと思われる。（第14図４）蓋では、凝宝珠のつまみを付けたものがあり（第12図11）ほぼ８Ｃ代のものと思われる。その他、断面が５角形となる把手部分が認められる。（第11図22）

甕の破片は多数出土しているが、時期は確定することが出来ない。ただこの中には、焼の状態から判断して、平安以後の須恵系のものも若干含まれているようである。

(イ) 土師器

土師器は細片が多く、器形を知り得るものは、ごく少ないが、ＳＫ２７内出土の土師器甕は口径25.4㎝、器高26.1㎝の平底に近いものである。（第15図15） 土器支脚、こしき又はかまどに類するものもある。（第16図27）



第11図　第Ⅰ区出土遺物実測図
10. SK10出土　12. SD01　14. SD01　15. P3　16. SD01　21. SD01　23. P7

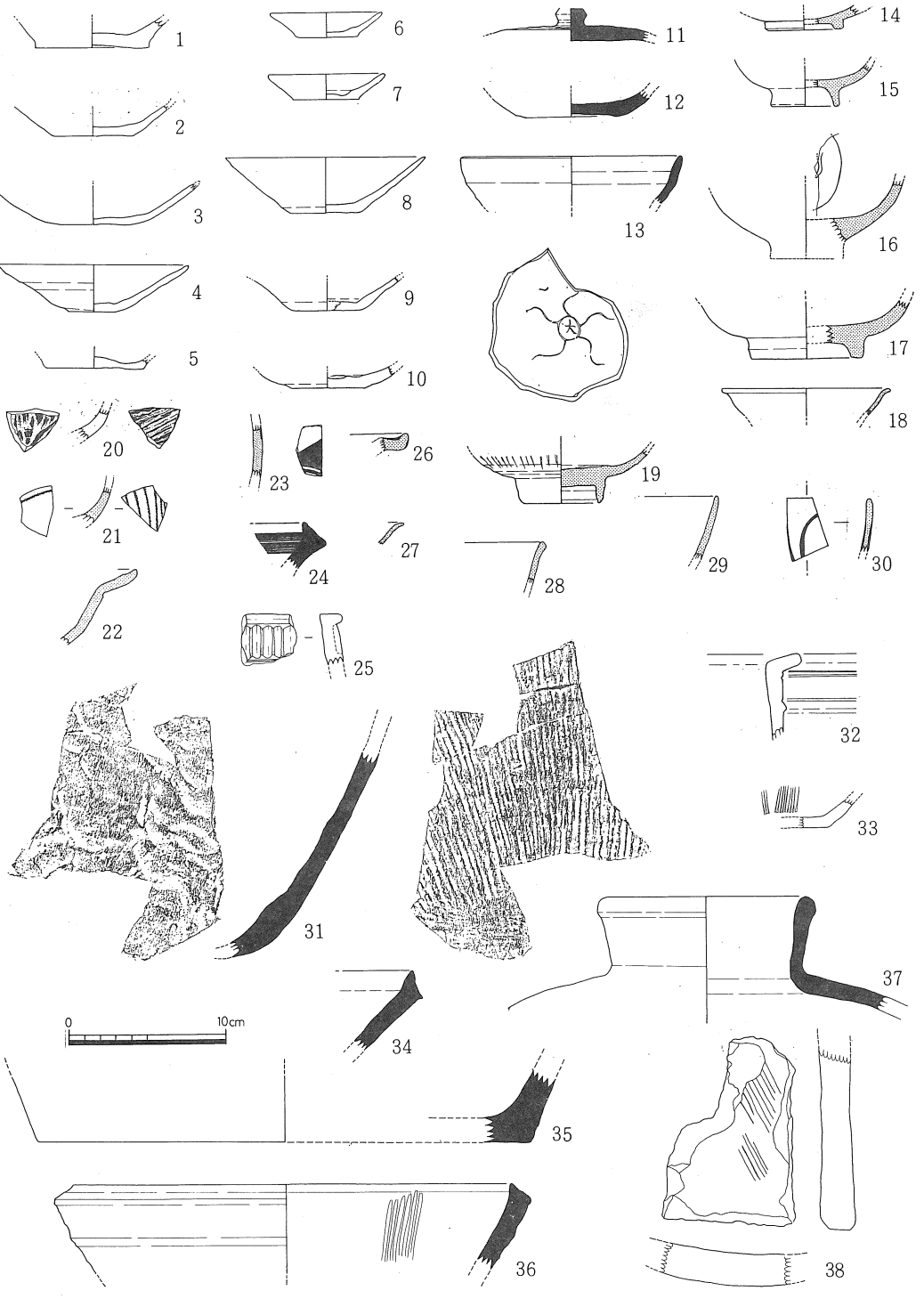
(ウ)　土師質土器

所謂「かわらけ」の類が大半である。その法量は口径最少5cm、最大11cm、器高最低1cm、最高2.5cmのもので、回転糸による切り離しが殆んどである。

例外的に、底部外面から体部外面にかけてカキ目調整を施したものがある。(第11図14) また、箸置き(第11図17)、脚付(3脚以上)の坏(第11図15)、高坏の脚部(第14図7)も出土している。

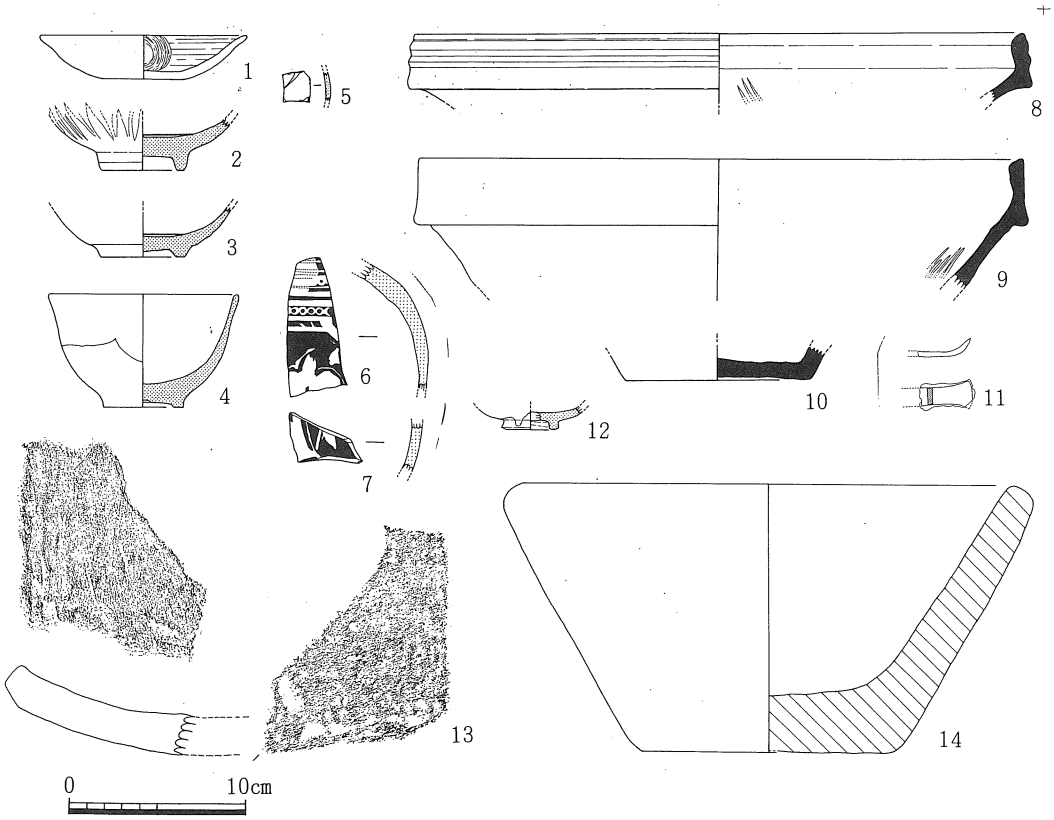
(エ)　瓦質土器

3点ある。(第12図25、32、33) いずれも火鉢で口縁部上面が水平に折れ曲がり上面が平坦となるもので、第12図25の方は、口縁外面直下にタテ格子状の文様部分を構成する。いずれも中世のもの。

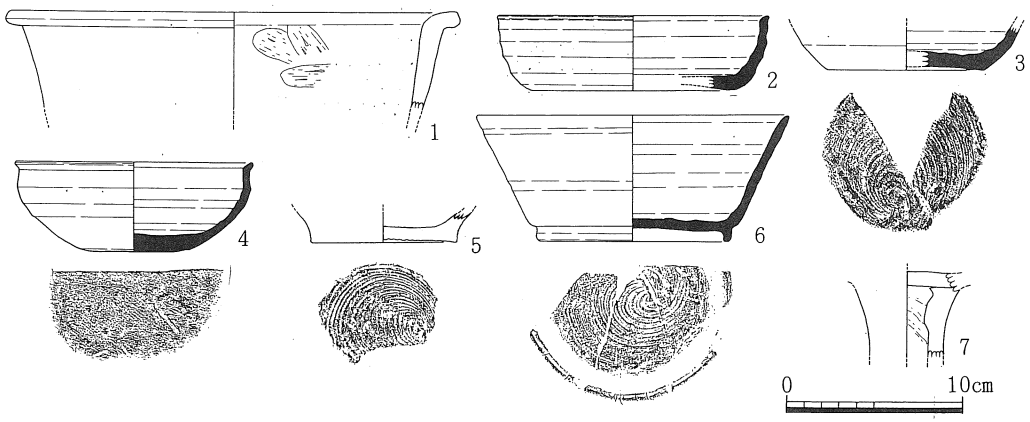


第12図　第Ⅱ区出土遺物実測図(1)

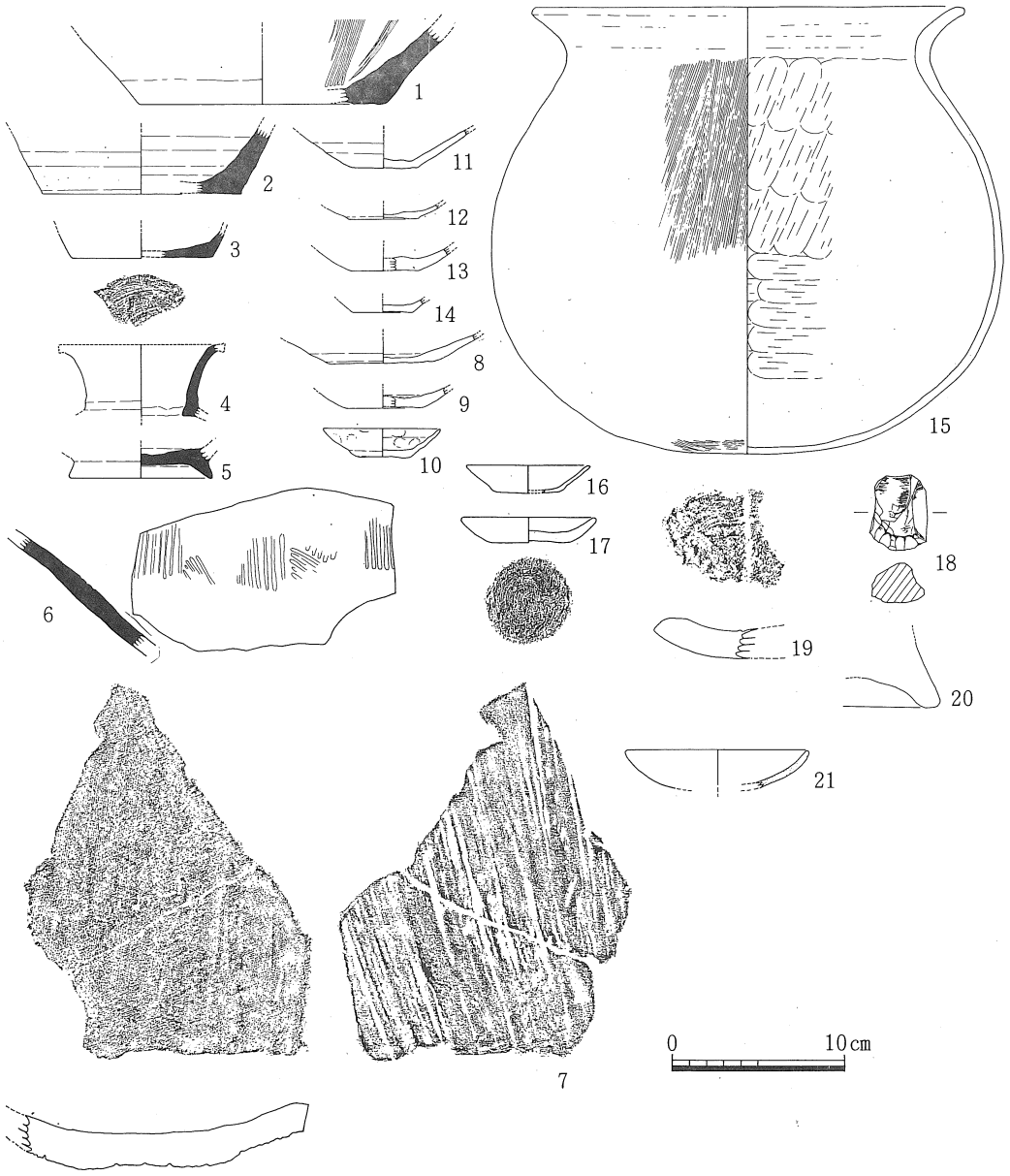
6.P 274出土　12.SK10　16.P258　23.SD20　26.P284　33.P263　37.P98　38.SE02出土
（Pはピット番号）



第13図　第Ⅱ区出土遺物実測図(2)
1～10.ＳＥ０２内出土　11.ＳＫ２８　14.ＳＤ０２内出土



第14図　ＳＤ０３出土遺物実測図



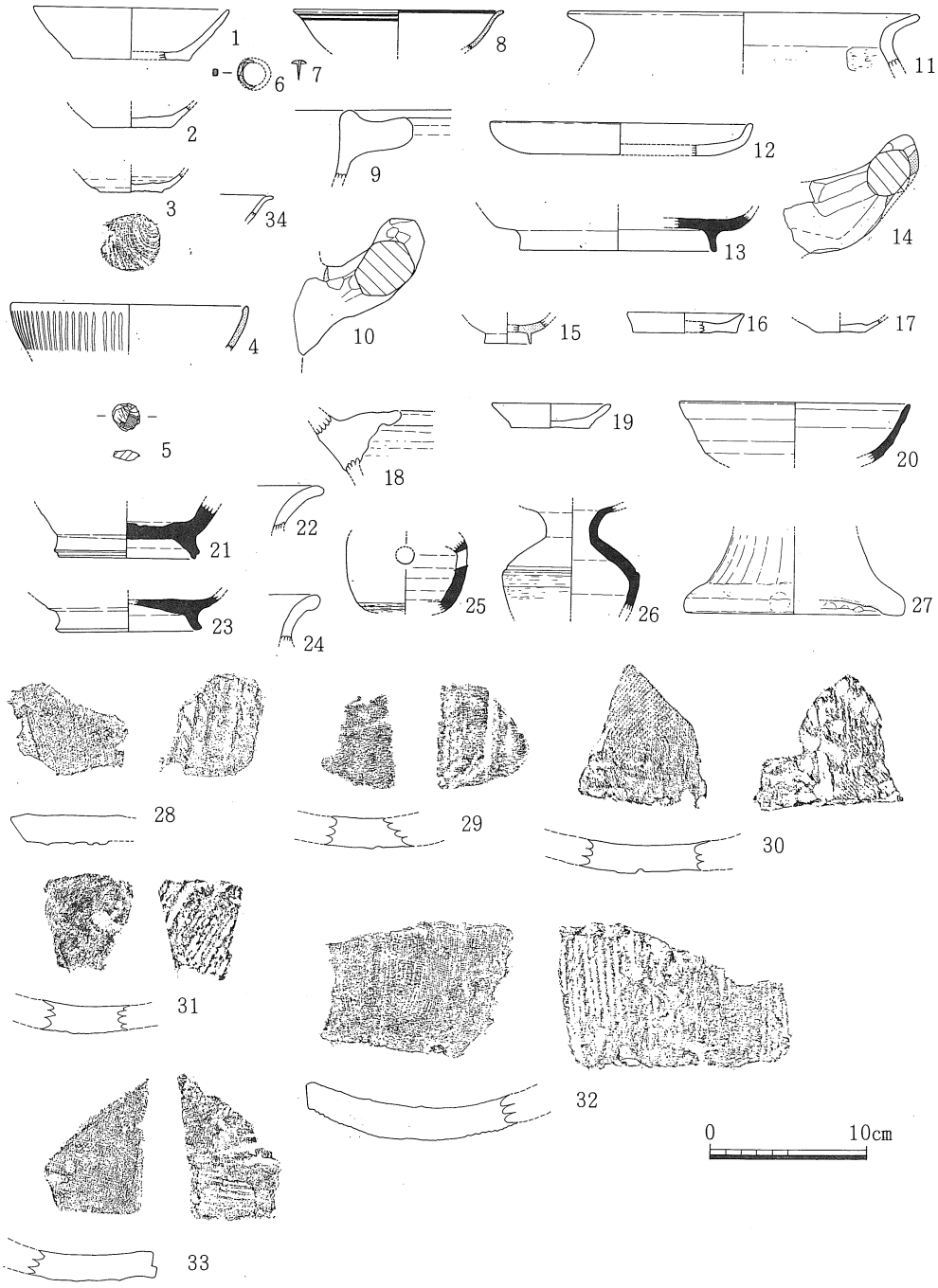
第15図　第Ⅲ区出土遺物

(オ)　瓦

いずれも平瓦で、須恵質のものと土師質のもの２種がある。

上面はいずれも麻布のような目の粗い布目痕を有し、下面は縄目様の叩きや、菱形文様の叩き痕を残している。

(カ)　鉄製品



第16図　第Ⅴ区出土遺物

11～15. 29～31. ＳＫ０６出土　16～19. ＳＫ０７出土　20～27. ＳＫ１１出土　33. Ｐ３０８出土

角釘が１本認められた。断面は、５.５×５.０ミリのほぼ正方形である。(第11図25)

(キ) 青銅製品

鋲と思われるもので突針の長さは12ミリ、直径３ミリ、上部の笠の直径９.５ミリを計る。(第16図7)

他に青銅製環がある。さしわたし２.１㎝、断面は長方形で３×４㎜を計る。(第16図6)

(ク) 古　　銭

合計５枚ある。内容は下表のとおり。

第２表　出土古銭一覧

名　　称	初　鋳　年	出　土　箇　所
天　聖　元　寶	１０２３　(北宋)	Ⅰ区　Ｐ６内
開　通　元　寶	６２１　(唐)	Ⅱ区　ＳＤ０２東側　Ｐ１０９内
熙　寧　元　寶	１０６８　(北宋)	Ⅱ区　ＳＤ０２東側　Ｐ１０９内
皇　宋　通　寶	１０３９　(北宋)	Ⅱ区　ＳＤ０２東側　Ｐ１０９内
不　　明		Ⅰ区　ＳＤ０１内　中層
不　　明		Ⅱ区　ＳＫ１９東側　Ｐ２６７内

(ケ) 石 製 品

第13図14は石臼で、硬質、黄褐色、砂岩製のもの。推定器高20.3㎝、底径約14㎝、口径約30㎝、厚みは、口縁部で２.５㎝、中ほどで３㎝、底部中央で３.４㎝を計る。

第16図５は、青めのう製の平玉の未製品である。直径1.75㎝、厚み０.７㎝を計る。

第15図18は、青めのう石核である。一部にタテ状にハクリした痕跡が残っている。

(コ) 陶　　器

国産のものでは、備前焼の摺鉢、壷、唐津系の摺鉢や鉢、碗などがある。

まず備前焼の摺鉢には、口縁部の形態の差異から２種類に分かれる。

一つは、口縁端面をへらで切って平縁に作っているもので14世紀頃（鎌倉末）のものと推定される。(第12図34、36)

他方は、幅広の縁帯をもち、垂直に立ち上がり、下部は下に垂れ下がっている。内面のおろし目は７～９条の櫛目である。15C頃（室町末）のものと推定される。(第14図8、9)

次に唐津系の摺鉢は、底外面を回転糸切りにより切り離したもので、内面のおろし目は６～７条の櫛目で、密に刻まれている。17C中頃のものと思われる。この他に唐津系の陶器としては、17C中頃の鉢(第12図22)、江戸初期の皿(第12図14)、17C前半（江戸前期）の刷毛目碗(第12図20)や二彩唐津がある。他に17Cの緑釉碗、瀬戸、美濃の灰釉小皿がある。

中国産の陶器では、褐釉の小壷又は茶入れと思われるものがある。

朝鮮半島産のものは、朝鮮王朝時代（李氏朝鮮）の粉青沙器（ふんせいしゃき）象嵌文瓶が注意される。粉青沙器は灰色の胎土の上を白土で粉粧しその上に透明釉とでもいうべき釉薬をかぶせたものであるが、日本国内での出土例はまれであるといわれる。15C後半頃のものと思われる。同一個体品と思われるものが、昭和57年度の県の調査時にも出土している。（第14図6、7）

(サ) 磁　　器

外国産のものでは、中国産のものと朝鮮産のものとがある。この内、中国産のものでは、14～15C後半（明代）の青磁蓮弁文碗（第13図2）、青磁雷文碗、白磁の皿（第12図18、27）、碗（第13図5）、青磁の盤（第12図26）、16C代（明代）では、前半頃の白磁青花（第16図15）、青磁蓮弁文碗（第12図19）、16C終わり頃の白磁青花小碗（口縁部内面に四方欅文を描くもの）などがある。

国内産のものでは、16C前半の古伊万里焼の碗、江戸期の伊万里焼、18～19Cにかけての肥前系磁器が挙げられる。

出　土　遺　物　観　察　表

【須恵器】

実測図番号	出土箇所	器　種	特　徴	焼成色調	胎　土	備　考
第11図23	第1調査区堆積土中	高台付坏？	底径：9cm 内面底－指ナデ	暗灰色	若干の砂を含む	
第11図22	第1調査区P225	とっ手		良好 青灰色	0.5㎜以下の砂少含	
第12図11	第Ⅱ区堆積土中	凝宝珠つまみ蓋	ツマミ最大径：2.0cm	良好 暗灰色	普 3㎜以下の砂やや多含	ロクロ：右
第12図35	第Ⅱ区堆積土中	甕	復元底径：約36.5cm	良好 暗青灰色 （断面は紫桃色）	密 4㎜以下の砂粒含	ロクロ：右？
第12図31	第2区堆積土中	甕		良好 青灰色	密、3㎜以下の砂粉含	
第12図12	第Ⅱ区SK10	坏	復元底径：5.8cm 静止糸切？	良好 黒灰	密、3㎜以下砂含	
第16図13	第Ⅱ区P96	坏	復元底径：14cm	良好 淡灰色	密、0.5㎜以下砂少含	ロクロ：右
第15図3	第3区周濠内	坏	復元底径：8.3cm 糸切り	良好（ローリングを受ける） 暗灰色	密、1㎜以下の砂少含	ロクロ：右？
第15図4	〃	壷	復元底径：約6.7cm	暗灰色	砂はあまり含まれず	

第14図 2	第３区 周濠内	壷	復元底径：約11.6㎝	暗灰色	砂をあまり含まず	底部から2.5㎝の胴部の範囲をヘラケズリ ロクロ：右
第15図 5	第３区 第15G 堆積土中	高台付壷	復元底径：８.５㎝	良好 黒灰色	普、２㎜以下砂含	ロクロ：右
第14図 4	Ⅳ区 堆積土中	坏	復元口径：15.3㎝ 器　　高：5.15㎝ 静止糸切り	良好 灰色	普、５㎜以下の砂粒含	ロクロ：右
第14図 3	Ⅳ区 ＳＤ０３	坏	復元底径：８.８㎝ 回転糸切り	良好 暗灰色	密、２㎜以下の砂含	ロクロ：右
第14図 2	Ⅳ区 ＳＤ０３	坏	復元口径：15.4㎝ 復元底径：11.4㎝ 復元高径：４.３㎝ 回転糸切り	良好 暗灰色	密、２㎜以下の砂含	ロクロ：右
第14図 6	Ⅳ区 ＳＤ０３ 堆積土中	高台付坏	口径：17.6㎝ 器高：７.２㎝ 高径：11.0㎝ 回転糸切り	普通 暗青灰色	細かい	ロクロ：右
第16図 20	第５区	坏	復元口径：14.6㎝	良好 暗青灰色	普、３㎜以下の砂含	ロクロ：右
第16図 21	第５区	高台付蓋	脚底径：８.８㎝	良好 茶紫色	普、１㎜以下の砂含	
第16図 13	第５区 Ａ3区 SK06 堆積土中	高台付坏	復元底径：12.4㎝	普通 緑青灰色	普、１㎜以下の砂やや多含	
第16図 23	第５区 ＳＫ－１１	高台付坏？	復元底径：９.４㎝ 回転ナデ	良好 灰紫色	密、３㎜以下の砂含	ロクロ：右？
第16図 25	第５区 ＳＫ１１	瑞		良好 外－青灰色 内－白青灰色	密、２㎜以下の砂少含	ロクロ：右
第16図 26	第５区 ＳＫ１１	瑞	頸部最小径：３.３㎝	良好 暗青灰色 淡青灰色	密	ロクロ：右？

【第１区土師器】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第11図 1	第１調査区 周濠内	坏	底径：４.１㎝ 回転糸切り	良好 桃肌色	密	ロクロ：右？
第11図 2	〃	坏	底径：４.１㎝ 回転糸切り	普通 白桃色	やや粗、３㎜以下の砂多含	ロクロ：右？
第11図 3	〃	坏	底径：５.１㎝ 糸切後？ ナデか？	良好 桃肌色 （ローリング受けている）	密、１㎜以下の砂少含	
第11図 4	〃	坏	復元底径：４.６㎝ 糸切後ナデ？	普通 白桃色	密、１㎜以下の砂少含	ロクロ：右

第11図 5	第１調査区 周濠内	坏	底径：3.7㎝ 回転糸切り	良好 赤肌色	密、砂はごく少含	
第11図 6	〃	坏	復元底径：4.8㎝	良好 桃肌色	密、２㎜以下の砂含	ロクロ：右
第11図 7	〃	坏	底径：約3.7㎝ （ローリングを受けている） 回転糸切り	良好 桃肌色	密、１㎜以下の砂含	ロクロ：左 全体に雑な造り
	〃		回転糸切り	良好 肌色	密	
第11図 8	〃	坏	回転糸切り	良好 茶橙色	密、１㎜大の長石を若干含む	
第11図 13	〃	坏	口径：15.3㎝ 底径：4.6㎝ 器高：3.5㎝ 回転糸切り	良好 （底部一部黒ずむ） 桃肌色	密、２㎜以下の砂やや多含	ロクロ：右
	〃		復元底径：5.5㎝ 回転糸切り	良好 白肌色	密、１㎜以下の砂少含	ロクロ：右？
	〃		復元底径：4.8㎝ 回転糸切り	良好 肌色	密	
第11図 9	〃	坏	回転糸切り	良好 肌色	密、１㎜大の砂粒を若干含む	
第11図 14	〃	坏				
第11図 17	〃	箸置き	内面－回転ナデ	良好 肌色	普、0.5㎜以下の砂含	
第11図 15	〃	脚付き坏(?)	復元口径：13.0㎝ 復元底径：11.7㎝ 復元器高：4.5㎝	良好 茶肌色	密	ロクロ：右か？
第11図 11	〃	坏	復元口径：11.6㎝ 復元底径：4.8㎝ 復元高さ：2.6㎝ 糸切後ナデか？	やや悪い 肌色	やや粗	ロクロ：右
第11図 12	〃	坏	復元口径：10.8㎝ 復元底径：7.5㎝ 復元高さ：1.8㎝ 回転糸切り	良好 白肌色	密、砂をほとんど含まない	
第11図 10	第１調査区 ＳＫ１０	坏	復元口径：8.6㎝ 復元器高：1.7㎝	普通 白肌色	密、２㎜以下の砂少含	ロクロ：右？

【第２区土師器】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第12図 1	第２調査区 堆積土中	坏(?)	復元底径：7.1㎝ 回転糸切り	良好 茶肌色	密、砂をほとんど含まない	ロクロ：右
第12図 2	〃	坏	復元底径：4.9㎝	普通 肌色	やや粗、１㎜以下の砂含	ロクロ：右
第12図 5	〃	坏	回転糸切り		細砂含	

第12図 3	〃	坏	復元口径：13.6㎝ 復元底径：4.0㎝ 復元高さ：2.8㎝ 回転糸切り	不良 （一部黒褐色） 白肌色	普、1㎜以下の 砂含	
第12図 4	〃	坏	復元口径：12.0㎝ 復元底径：3.3㎝ 復元高さ：3.0㎝ 回転糸切り	良好 肌色	普、2㎜以下の 砂やや多含	ロクロ：右
第12図 6	第2調査区 P274	坏	復元口径：7.2㎝ 復元底径：3.8㎝ 復元器高：1.6㎝ 回転糸切り	良好 肌色	密、1㎜以下	ロクロ：右
第12図 7	〃	坏	復元口径：7.5㎝ 復元底径：4.2㎝ 復元器高：1.6㎝	普通 桃肌色	普	
第12図 8	第2調査区 SP258	坏	復元口径：12.6㎝ 復元底径：4.6㎝ 復元器高：4.6㎝ 回転糸切り	砂と褐色の石粒 （2㎜大） を若干含む		内外面に造形時 の指頭痕
第12図 9	〃	坏	復元底径：約4.4㎝ 回転糸切り	明黄褐色	砂をあまり含ま ない	磨滅が著しい
第12図 10	〃	坏	復元底径：約4.6㎝	暗黄色 黒班点	砂をあまり含ま ない	

【第3区土師器】

実測図 番号	出土箇所	器種	特徴	焼成 色調	胎土	備考
第15図 20	第3調査区 堆積土中			暗黄褐色	砂を含む	土製支脚片
第15図 12	〃	坏	復元底径：4㎝ 回転糸切り	暗黄色	砂を含まない 細かなもの	
第15図 17	〃	坏	復元口径：7.6㎝ 復元器高：1.5㎝ 回転糸切り	普通 赤肌色	普、2㎜以下の 砂含	ロクロ：左回転
第15図 11	第3調査区 周濠内	坏	復元底径：4㎝	黄褐色	砂を含まず 細かい	
第15図 16	〃	坏	復元底径：7.3㎝ 糸切り	明黄褐色	〃	
第15図 14	第3調査区 第6グリッド	坏	復元底径：3.6㎝ 回転糸切り	明黄褐色	砂を含まない 細かなもの	
第15図 13	〃	坏	復元底径：約4㎝ 回転糸切り	黄褐色	〃	
第15図 10	第3調査区 第7グリッド 周濠内	坏	復元口縁：7㎝ 復元底径：3㎝ 復元器高：1.8㎝ 回転糸切り			
第15図 8	〃	坏	復元底径：約6㎝ 回転糸切り			

第15図 9	〃	坏	復元底径：約 4.4 cm 回転糸切り			
第15図 15	第３調査区 ＳＫ２７	壷		良好 黄褐色	１㎜以下の砂多含	ロクロ：右

【第４区土師器】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第14図 1	第４調査区 ＳＤ０３	甕？	復元口径： 26 cm	不良 黒褐色	やや粗	ロクロ：不明
第14図 7	〃	高坏		普通 茶肌、白肌色	普、２㎜以下の砂含	ロクロ：右？
第14図 5	〃	坏	復元底径： 8.2 cm 静止糸切り	普通 赤茶色	密、１㎜以下の砂を少し含む	ロクロ：左

【第５区土師器】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第16図 3	第５調査区 堆積土中	坏	底径： 4.0 cm 静止糸切り	普通 桃肌色	密、２㎜以下の砂少含	ロクロ：右？
第16図 10	第５調査区 第20、21 グリッド 堆積土中	とっ手		やや悪い？ 黄灰色	やや粗	
第16図 9	〃	カマド？		普通 赤桃色	やや粗	
第16図 2	第５調査区 SK07 付近	坏	復元底径： 5.0 cm 糸切り	部分的に不良 白桃肌色	やや粗、５㎜以下の砂多含	ロクロ：右
第16図 12	第５調査区 Ａ３区	皿		良好 朱？　桃肌色	普、２㎜以下の砂やや多含	全体に朱を塗る？
第16図 11	第５調査区 ＳＫ０６	壷	復元口径：約 2.2 cm	良好 肌白色	普、１㎜以下の砂多含	ロクロ：右
第16図 14	〃	とっ手		普通 赤桃色	やや粗	
第16図 16	第５調査区 ＳＫ０７	小皿	復元口径： 7.4 cm 復元底径： 6.6 cm 復元器高： 1.25 cm 回転糸切り	良好 赤肌色	普、１㎜以下の砂含	
第16図 17	第５調査区 ＳＫ０７ 下層	坏	復元底径： 2.8 cm 回転糸切り	良好 桃肌色	普、２㎜以下の砂やや多含	ロクロ：左？
第16図 19	第５調査区 ＳＫ０７ 上層	坏	復元口径： 7.6 cm 復元底径： 5.0 cm 復元器高： 1.6 cm 回転糸切り	良好 桃肌色	普、０.５㎜以下の砂含	ロクロ：右？
第16図 1	第５調査区 ＳＫ１３	坏	復元口径： 12.3 cm 復元底径： 7.4 cm 復元器高： 3.35 cm 回転糸切り	良好 赤肌色 （ローリング）	普、１㎜以下の砂やや多含	ロクロ：左

第16図 27	第５調査区 ＳＫ１１	土製支脚	脚部径：約 14 ㎝	暗黄褐色	多量の砂粒	
第16図 22	〃	壷	口縁径は 30 ㎝以上	黄褐色	砂粒を含む	
第16図 24	〃		口縁径は 30 ㎝以上	暗黄色	砂粒を多量に含む	
第16図 18	〃	？		良好 桃肌色	やや粗、３㎜以下の砂多含	

【瓦】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第11図 16	第１調査区 周濠内	平瓦	厚さ：２㎝前後	やや不良 灰肌色	普、２㎜以下の砂含む	断面色調 中心部：灰白色 外側：灰肌白色
第14図 13	第２調査区 第５グリッド	平瓦	厚さ：2.4 ㎝	普通 白肌色	普、３㎜以下の砂をやや多く含む	
第15図 19	〃	平瓦	厚さ：1.6 ㎝前後	普通 肌褐色	やや粗、３㎜以下の砂含む	
第15図 7	第３調査区 周濠内	須恵質(?)瓦	厚さ：約２㎝前後 太さ２㎜前後の縄使用	やや不良(ローリングを受けている) 内：黄白色 外：青灰色	２㎜以下の砂を含む	断面色調 中心部：青白色 外側：黄白色
第16図 32	第５調査区 堆積土中	平瓦	厚さ：約２㎝	良好 黒褐色	粗、２㎜以下の砂を多く含む	
第16図 28	第５調査区	須恵質瓦	厚さ：２㎝前後	良好 青灰色	密、２㎜以下の砂含む	
第16図 30	第５調査区 ＳＫ０６	平瓦	厚さ：1.6 ㎝前後	良好 灰黒色	密	
第16図 29	〃	平瓦	厚さ：２㎝	やや不良 灰白色	普通	
第16図 31	〃	平瓦	厚さ：1.8 ㎝	普通 白肌色	普、１㎜以下の砂を多く含む	
第16図 33	第５調査区 Ｐ３０８	平瓦	厚さ：1.6 ㎝前後	やや不良 灰肌色	やや粗、２㎜以下の砂含む	
第12図 38	第２調査区 ＳＥ０２	平瓦		明褐色		

【陶磁器】

実測図番号	出土箇所	器種	特徴	焼成色調	胎土	備考
第11図 18	第１調査区 堆積土中	台付皿	底径：4.4 ㎝		にごった白色	白磁皿 （15Ｃ）
第11図 19	〃	台付皿	復元底径：4.7 ㎝		内面に緑色釉 外面に黄白色釉	緑釉碗 （17Ｃ）
第11図 20	〃	碗			にごった緑色	青磁碗
第11図 21	周濠内	すり鉢		良好 赤褐色		肥前

第12図 14	第2調査区 堆積土中	台付皿？	復元底径：4.8㎝	乳青色の釉		不明 陶器
第12図 15	〃	碗	復元底径：4.4㎝	にごった白色 濃緑色釉が点着		不明 磁器
第12図 20	〃	碗？		乳白色のハケ目	細砂少含	唐津
第12図 28	〃	碗		緑色釉		青磁（15C）
第12図 21	〃	碗		うすい緑色釉		青磁蓮弁文(15C)
第12図 36	〃	すり鉢？	復元口径：約29㎝	良好 暗青灰	密、2㎜以下の 砂含	備前 ロクロ：左？
第12図 19	〃	碗	底径：4.7㎝	緑色	暗灰色	青磁蓮弁文
第12図 23	第2調査区 溝内	俵壷 あるいは 瓶		透明釉	灰色粘土に白色 粘土をうめこみ 文様とする	粉青沙器 （15C後半～ 16C朝鮮）
第12図 32	第4グリッド 溝内	火鉢？	復元口径：40㎝以上	黒灰色	密、3㎜以下の 砂多含	瓦質土器 ロクロ：右
第13図 12	〃	高台付皿	復元底径：3.3㎝			
第12図 27	第2調査区 第4グリッド	小皿？		にごった白色		白磁
第12図 22	〃	鉢？		外面：うすい灰 白色釉 内面：緑色 黄褐色の文様	細砂少含	唐津
第12図 29	〃	碗		緑色釉		青磁（15C）
第13図 4	〃	碗	口径：10.6㎝ 底径：4.5㎝ 器高：6.5㎝		赤褐色	黒唐津？
第12図 25	第7グリッド	火鉢？		暗黒色	茶褐色に赤褐色 粘土混入	瓦質土器
第12図 17	第8グリッド 堆積土中	碗		にごった緑水色		青磁
第13図 2	ＳＥ０２	碗	底径：4.8㎝ 見込みに印花文	青釉		青磁 蓮弁文碗(15C後半)
第12図 24	〃	すり鉢		淡黄色		備前
第13図 6	〃	俵壷 あるいは瓶				粉青沙器 象嵌牡丹文
第13図 3	〃	碗	復元底径：4.0㎝	透明釉 灰色	灰色、砂粒多い 砂粒痕あり	
第13図 5	〃					白磁破片
第14図 9	〃	すり鉢		赤紫色		
第14図 8	〃	すり鉢		〃		
第13図 10	〃	壷		内：白色 底：暗灰色		

第12図 37	Ｐ９８	壷	復元口径：約13㎝	良好 暗灰色	密、２㎜以下の 砂粒多含	備前 ロクロ：右？
第12図 34	Ｐ２４３	すり鉢				備前（14Ｃ）
第12図 16	第２調査区 Ｐ２５８	碗		緑色		青磁 内面に文様あり
第12図 33	Ｐ２６３	すり鉢		やや悪　外－灰 内－白	粗、３㎜以下の 砂多含	瓦質土器
第12図 18	Ｐ２６４	小皿？	復元口径：10.7㎝	白色		白磁（16Ｃ）
第12図 30	Ｐ２６５	碗		暗緑色		
第12図 26	Ｐ２８４	盤		緑色		青磁（15Ｃ）
第15図 6	第３調査区 周濠内	甕		良好 外－赤茶色釉 内－暗黄灰色 （釉なし）	普、２㎜以下の 砂多含	備前 外面に７条単位 の溝状線
第15図 1	〃	すり鉢	復元底径：14.4㎝	外：青黒 内：白灰 断：紫桃	やや粗	ロクロ：時計 （右） 備前
第15図 21	第３調査区 第7グリッド	皿	復元口径：10.6㎝	乳白色		白磁（15Ｃ）
第16図 15	第５調査区 ＳＫ０６	碗				白磁青花(染付) 16Ｃ中心
第16図 8	第５調査区 Ｐ２９３	小皿？		ややくすんだ白色 不透明釉にややく すんだ紺色の模様		白磁青花
第16図 4	第５調査区 Ｐ３２７	碗	復元口径：15.0㎝			青磁碗
第16図 34	第５調査区 Ｐ３３３	小皿		白色		白磁

Ⅳ　文献史料からみた黒田館跡

1.　はじめに

黒田館の存在した時期は明確に限定できない。しかし、本遺跡を発掘調査による出土遺物から判断すると、中世後期のそれも南北朝から室町初期の遺物が中心をなしていると推定される。もちろん奈良時代から現代に至る遺物も併出していることは前述のとおりである。

さて文献史料から考察するに、直接本遺跡についての史料は存在しないが、遺構が存在したと思われる山代郷・大庭保・田尻保などの記載のあるいくつかの文献があるので、ここでは、これ

らの中世後期の荘園を中心に考察し、具体的にこの館周辺の当時の社会状況をいくぶんなりとも明らかにしたい。

まず中世後期の出雲国について概観する。南北朝期においては、中央での内乱に影響され、出雲国内の守護や国人などの在地領主も行動を起している。出雲国では北朝方として塩冶高貞・出雲国造家・鰐淵寺北院・三刀屋助重等が、南朝方には鰐淵寺南院・朝山家就らが味方した。この南北朝の約6年間の争乱の間に出雲国の守護が転々とし、弱少武士は次第に姿を消し、三刀屋氏・三沢氏・赤穴氏などのいわゆる国人層が力を伸ばし割拠するようになる。南北朝以後も、明徳の乱、応仁・文明の乱など戦乱の世が続くが、京極氏から独立して戦国大名に成長した尼子氏が台頭する。尼子氏の支配は強大であったが、日常的な戦乱は頻発し不安定な社会状況であったと思われる。山代郷など現在の松江市南部の地域も、この影響を受け、時には戦場となることもあったと考えられる。

2. 周辺の荘園

黒田館の所在地は現在の山代町にあたるが、中世においては、はっきりした地名を比定することは難かしい。しかしおそらく山代郷・大庭保・田尻保のうちどれかに含まれていたことは確かであると思われるので、ここではこれらの荘園について概観することにする。

大庭保は鎌倉期からみえる保名であり、出雲国意宇部のうち神魂社領の一つである。初見史料は1215（建保3）年7月の「出雲守護源某下知状」（出雲国造家文書）である。この大庭保は1249「出雲国神魂社領大庭田尻保地頭職」が下知されており、この頃から地頭職を出雲国造家がもち支配を及ぼしていたと思われる。出雲国造家は南北朝期に分裂する訳だが、この時神魂社家秋上氏は北島家につき、大庭の神田を預り置いている。秋上氏はその後も大庭保の代官職を務め、御給分・神主職を子孫に譲与している。

田尻保の初見史料は大庭保と同様に1215（建保3）年7月の「出雲守護源某下知状」である。そして当保の地頭職も出雲国造家が領知していた。田尻保も出雲国造家の分裂を契機にその支配は神魂社家の秋上氏によって行われるようになる。また田尻保は史料上「大庭田尻」あるいは「大庭田尻保」「田尻大庭」などとして連称されていることが多く、大庭保とともに当保は中世を通じて神魂社領であった。また1307（徳治2）年12月5日付の「国造出雲泰孝譲状」（出雲国造家文書）に「大はのたしり」とあり、田尻保が大庭保の中に組み込まれつつあったことを示している可能性もある。

山代郷の初見史料は1249（建長元）年の「杵築社造営所注進状」（千家文書）であり、流鏑馬勤仕を命ぜられている。南北朝期になると、大庭・田尻保と同様に、国造家の分裂の時、神魂社家

秋上氏が山代郷内の神田を預り置くようになり、その後も秋上氏は山代郷の支配を行っていたと思われる。

以上のように周辺の荘園は中世後期になると神魂社家秋上氏の支配が強くなると考えられる。黒田館周辺も現在の神魂神社との位置関係からも明らかなように、神魂社領に含まれており、出雲国造家とも強いつながりを持っていたと考えられる。

3. 史料上にみえる「屋敷」、「館」

これまで中世後期を中心に黒田館の周囲の状況をみてきたわけだが、ここでは当遺跡と直接関連すると断言はできないが、秋上文書を中心に、史料上にみえる「屋敷」「館」という語に注目してみたい。

1461（寛正2）年の「やの國泰賣券」（秋上文書7）によれば、やの國泰が屋敷壹所を貳貫五百文で売り渡していることがわかる。その中で屋敷の在所について「くろた（黒田）の藤さへもんやしきなり、但いまは彦さへもんやしきなり」という記載がある。一般に中世後期においては貨幣経済の発達などとともに、経済的困窮を理由とした土地などの売買が盛んになり、この史料もそのような状況を背景としたものだろう。

1470（文明2）年の「秋上栄國知行分坪付」（秋上文書10）によると、大庭保・田尻保・山代郷などの支配を秋上氏が行っていたことは先にもふれたが、この史料からそのほかにも大草郷・竹屋郷などにも所領をもっていたことが伺える。また「権神主分坪付」とともに「同やしき分」の記載があり、それによると大草郷内に「道きん屋敷」「みさきかきの屋敷」「かけきやしき」という屋敷の存在がわかる。また注目すべきはいずれの屋敷にも「ほりあり」という記載があることである。本来「屋敷」とは建築物の家屋という意味ではなく、中世では家屋を含む土地のことであり、その中に畑などをもっているのが通常であり、特にある程度の領主層になると防禦のための堀や土塁を持っていたようである。

また1482（文明14）年正月24日付の「宮富秀頼賣券」（秋上文書14）によれば「田尻の安保垣」を「小原の足立次郎右衛門」に売り渡したことがわかる。同年5月10日付の「中兼孝譲状」（同15）でも「黒田の田中屋敷」を「ほうちう垣の左エ門三郎」に賣貫八文で売り渡したことがわかる。これもやはり中世後期に一般的にみられるような土地売買の盛行を背景にしたものであるが、ここでは「宮富」「中」という神魂神社の社官が「小原の足立次郎右衛門」「ほうちう垣の左エ門三郎」という。おそらく土豪層と思われる人物に売り渡していることである。

このように「屋敷」については、他にも例が○○屋敷を某に譲る、あるいは売り渡すというような賣券、あるいは知行分を示す坪付など「屋敷」という記載をみることができるが、具体的な

建築物として屋敷をとらえることは限界があるようである。

4. 結　　語

文献史料からみた黒田館については具体的に明らかにすることはいまだ不十分であるが、館が存在した時期の周囲の歴史的環境についてはある程度明らかにすることができると思われる。すなわち、黒田館が存在した山代郷・大庭保・田尻保は、中世後期において神魂神社の社家である秋上氏の支配下におかれ、その支配の内容を見れば出雲国造家北島氏の代官職、また秋上氏の直轄領、社官の「宮富」などの所領が中心であったと考えられる。これらの支配の下で、黒田館のような屋敷をもつ土豪層が存在した。土豪の明確な階級的規定は諸説があって定まらないが、峰岸純夫氏は次のように規定している。「「土豪」は下人、小作人に対しては搾取者であるが、一般百姓とは土地所有者という面で同一性をもち、支配権力からは「地下百姓」として年貢・公事を収奪される存在である。」というように規定している。また氏によれば「土豪の屋敷を中心に直営地、その周辺に下人搾取地、さらに外縁部に一般農民への小作地という耕地分布が一般的傾向として指摘できる」とされており、現在の黒田館跡周辺の景観をみれば明らかなように、低丘陵上に遺構は存在し、周囲に水田を持つことからも、ある程度氏の指摘と合致する面もあり、当遺跡については土豪クラスの館と考えて無理はないと思われる。

最後に今後に残された問題を二、三指摘しておきたい。まず「黒田館跡」という呼称の問題である。現在残っている小字をみると遺構の館跡の所在地は「岡」といい、その西側を「小門」というようである。黒田という字名を調べると、現在の長者原の南側を「黒田畦」というようであり、現在も「黒田」「下黒田」という地名が残っているが、当遺跡を「黒田館」というには位置が離れすぎているように思われる。

次に郷域、保域の問題である。秋上文書の中には「大庭保神魂神田坪付」（秋上文書189）「大草郷内六所神田坪付」（秋上文書194）などがあるので、現在の地名を検討すれば、当時の大庭保・山代郷の保域、郷域をある程度明らかにすることができると思う。（遠藤浩巳）

＜参考文献・史料＞

- 『新修島根県史、通史篇１』
- 米原正義『出雲尼子一族』、新人物往来社、1981年
- 峰岸純夫「村落と土豪」（『講座日本史３封建社会の展開』）、東大出版会、1970年
- 「秋上家文書」（『出雲意宇六社文書』所収）
- 『出雲国造家文書』
- 「千家文書」（『新修島根県史、史料篇１』所収）

V 小　結

黒田館跡については、これまで２回にわたり調査が行われたが、いずれも開発工事中に行われた簡略なものであったり、試掘調査であったりして十分な成果が得られなかった。

今回の調査では、調査面積は約3,100㎡と広範なものであったが調査期間が必らずしも十分とは云えず、検出遺構に対する現場での十分な検討を行うことが出来なかったことは大変残念であった。

とはいえ、今回の調査で、かなり面的な広がりをもつ遺構の検出が計られたので、これまでに記録し得た遺構の状況なり、遺物の傾向から本館跡の性格について若干考えてみたい。

(1) 遺構について

ア、建物跡

周濠内の地山面には、おびただしい数のピット群が検出された。その数は245個以上を数える。その殆んどが、直径30～50㎝、深さ20～90㎝と深くてしっかりしたものであり、建物の掘立柱穴と思われる。これらは、あるいは、近接し、あるいは、重複し、一見不規則に分布しているようであるが本来は、一定間隔に平行あるいは直角に配列されたものと思われる。しかし、今、これらの中からそうした計画的な配列を見出だすことは、非常に困難である。恐らく長年月にわたって建て替え、あるいは新規に建築されたことなどの理由により複雑な分布状況となったのではないかと考えられる。

ピットの中には底面に扁平な石をすえたもの（Ｐ２５７、Ｐ３１２）もあったが、大半は底面の平らな通常のピットであった。

以下、規模の分かる建物跡について概説する。

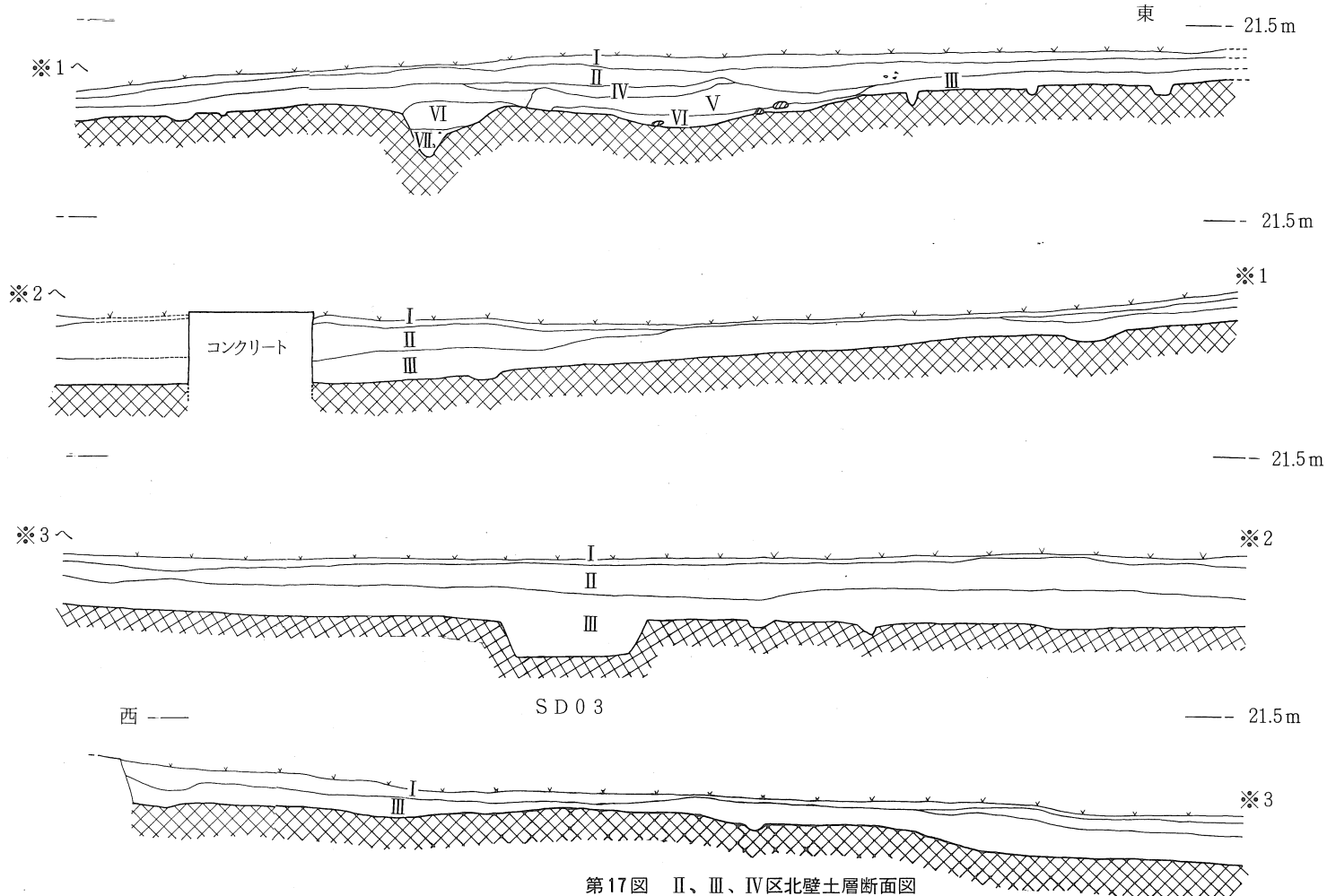
Ⅰ区で検出されたＳＤ０１は、東西３間以上、南北３間、東西の柱間の心々距離340㎝、南北の柱間の心々距離は1.95ｍを計る。各ピットが直径60㎝～90㎝、深さは60㎝と直径の比較的大きいものであったので、もとは、相当太い柱が使用されていたものと思われる。

ＳＤ０２は、東西３間以上、南北１間を計る。東西の柱間の心々距離は352.5㎝、南北間の柱間は4.5ｍを計る。

Ⅱ区で検出されたＳＢ０３は、南北５間、東西１間の細長い建物で、南部の東西両側に１間×１間の庇（ひさし）を付けるものである。南北の柱間の心々距離は2.40ｍ、南北3.0ｍを計る。

ＳＢ０１とＳＢ０２は、共に、北側の濠（ＳＤ０１）の方向とほぼ平行して建てられているので、館に関係した建物とみて間違いなかろう。

ＳＢ０４は、東西２間、南北３間を計り、東西の柱間の心々距離は3.1ｍ、南北間の柱間の心



第17図　Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ区北壁土層断面図

Ⅰ　褐色砂質土層
Ⅱ　暗褐色土層
（黄色地山ブロック包含）
Ⅲ　褐色土層
Ⅳ　暗褐色土層
Ⅴ　褐色土層
（黄色地山ブロック包含）
Ⅵ　黒褐色土層
Ⅶ　暗褐色土層
（黄色地上ブロックおよび石を含む）

々距離は、2.2＋3.8＋3.0ｍとふぞろいである。

ＳＢ０３とＳＢ０４は、ＳＤ０２の方向と平行関係にあるので、やはり館跡と密接な関連性を有するものである。

ＳＢ０５は、ＳＤ０１をまたぐ橋に続く道の門に相当する部分であろう。ＳＢ０６は、塀もしくは、門跡に相当する部分である。

イ、井戸跡

ＳＥ０１は、円型の井戸跡でさしわたし2.4ｍ、深さは全掘していないので不明であるが、2ｍまで確認している。内部の堆積土上層から備前焼の破片を多数発見したが、これは井戸上端から斜めに流れ込んだような状態であり、すでに井戸がかなり埋没した状態であったことが考えられる。

ＳＥ０２の井戸跡内部の暗褐色砂質土層中において、おびただしい数の石が発見されたが、これは、井戸を何らかの理由で埋めた時に捨てられたのか、あるいは、下部に石積みがあったのか不明である。

これらの石が含まれていた土層からは、朝鮮半島の陶器である粉青沙器、備前の摺鉢などが発見されており、その時期は、15Ｃ後半～16世紀代とされるので、井戸の使用年代もほぼその頃のことと思われる。

ウ、濠　跡

ＳＤ０１、ＳＤ０２

館跡の外周をめぐる濠で、北側の濠をＳＤ０１、西から南の濠をＳＤ０２と呼称しているが、恐らくこれはひと続きの濠であろう。

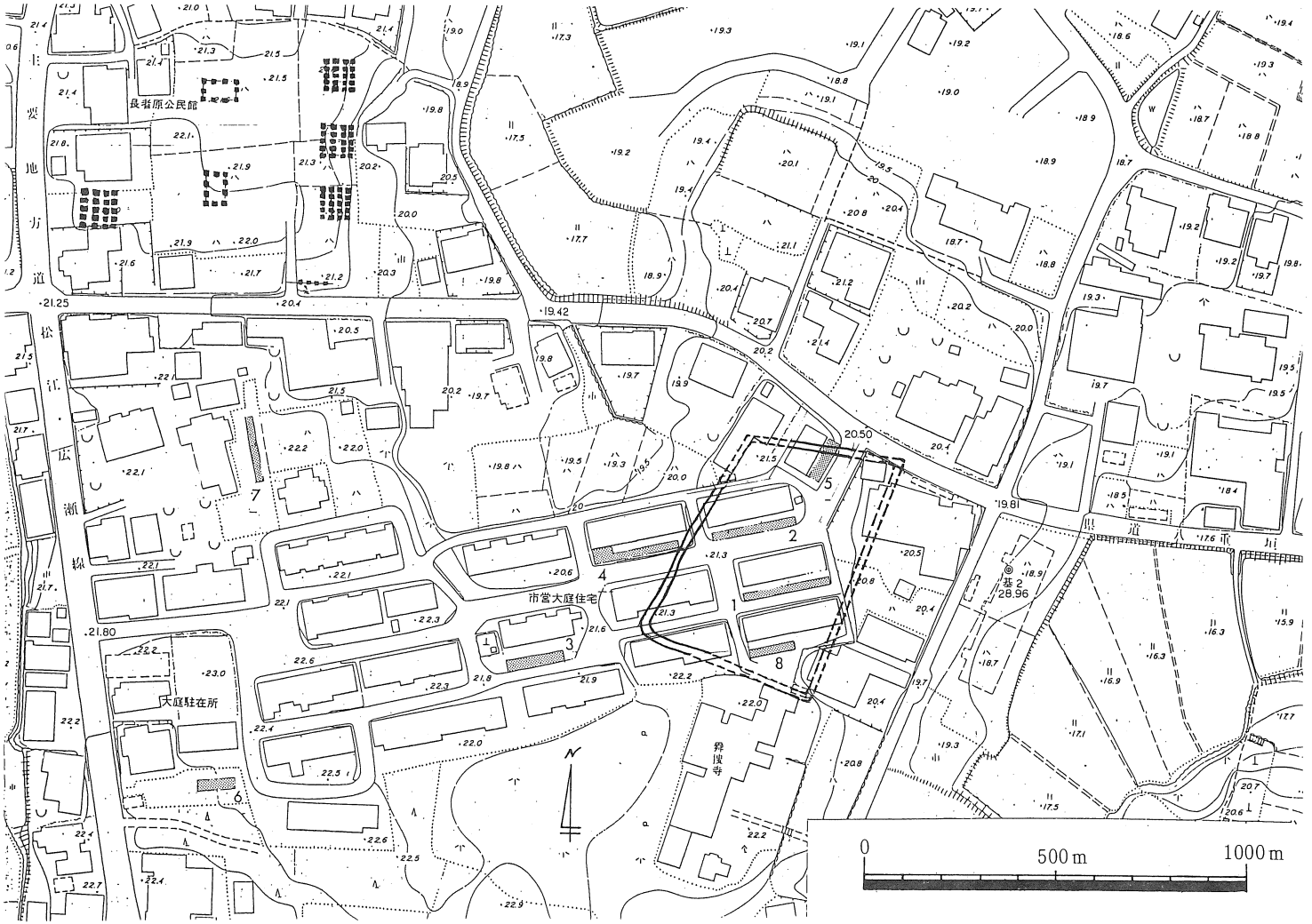
濠の上端は1.6～2.5ｍ、深さは0.9～1.3ｍ、とこの種の濠としては比較的小規模のものである。底面は、幅0.4～0.85ｍとわずかに平坦面を形成しているが、全体としては、Ｖ字形の断面とみてよい。南の濠では、二段の部分がある。

濠中の中ほどの堆積土層中からは、礫や転石がかなり群在していた。これは、濠が廃絶した後、自然というよりむしろ人工的に石が投棄された結果と考えられる。

この濠の平面企画について考えてみると、西の濠は多少曲折するもほぼ直線を呈しているのに対して、南の濠、西の濠との角部分から東方へ５ｍ位はほぼ直角に折れ曲がり直線に続くがそれより東方へは、徐々に北方へ曲がっていき、検出した最先端部と西の濠との角度を求めれば76度と鋭角になっていることが注目される。

一方、ＳＤ０１は、Ｉ区での検出部分は、ほぼ直線であるが、ＳＤ０２との続き具合を図面上で考えると調査区外の民有地の中で折れ曲がり、その角度は約100°と逆に開く。

次に、東の濠であるが、これは全く未調査部分であるので、昭和37年当時の土塁の測量調査を



第18図　山代郷正倉跡と黒田館跡（復元）の位置関係

手がかりに推測するならば、南の濠からやや鋭角気味に北へ折れ曲がり、そのまままっすぐ北上して北の濠に結びつくものと思われる。

このようにして、推定復元した館の平面基模は、北辺の東西長37.5m、南辺の東西長45m、東辺の南北長63.5m、西辺の南北長56mを計る台形を呈する。

濠は、断面V字溝の小規模であるが、そのすぐ内側に高さ0.5～1.5m、底辺4.2～5mの断面台形の土塁をめぐらすものであり防禦的機能をよく維持するものである。

前述の建物は、主として北半部にかたよっており、南半部にもピットは無数に認められるも明確な建物は無いのであるから広場的な性格が考えられる。外部へ通じる門が、建物の少なくなる境い目の西部分と南側に認められることもうなづける。

ＳＤ０３は、その方向が、ＳＤ０２と全く違っていることから館関連の溝ではない。溝内出土遺物をみても、８Ｃ後半から９Ｃ後半頃にかけての須恵器が出土しており、奈良時代末から平安時代前期にかけての溝と思われる。

その頃の施設としては、山代郷正倉跡が近隣の地に所在しており一方では、山代郷庁も周辺に推定されており、このような官衛跡関連の溝ではないかと思われる。

ＳＤ０４は、ＳＤ０３から７m西側にほぼ平行して所在するも非常に浅いものである。

ＳＤ０５は、長さ８mほどの溝状遺構であるが、ＳＤ０２とほぼ平行しており、館に関連するものであろう。

ＳＡ０１は、ＳＢ０１のすぐ北側に平行に所在する。心々距離は3.4mを計る。館関連のものと思われる。

ＳＡ０２は、ＳＢ０１、０２とＳＢ０４の中間に位置し、心々距離は一定していないが、ＳＢ０１、０２に平行しており、館関連のものであろう。

ＳＡ０３は、ＳＢ０３の東側に建物と平行に位置し館関連のものと思われる。

(2) 遺物について

遺物はピット内や土坑内から出土する他、遺構と無関係な状態で地山面付近からも多数出土している。

その中で最も量的に多いのは土師質土器、所謂かわらけの類である。大きさに２種あり、大形のものは口径8.5～11cm近く、器高は2.2～2.5cmを計る。直線上に外方へ開く式のものである。小形のものは、口径５～６cm、器高１～1.2cmを計る。底部の調整は回転糸切りである。中には、底部が上げ底で、底外面から坏外面にかけてカキ目調整を施した特異なもの(第11図14)もある。

土師器では、はっきり器形の分かるものは少ない。小型の甕（第14図１）や、朱彩の残る大型の甕（第15図15)、三足のつく坏で印花文をあしらったもの（第11図15)、箸置と思われる楕円

形土器（第11図17）、把手部分（第16図10、14）、土製支脚（第15図20、第16図27）などがある。

器形不明の小破片の多くは、殆んどかわらけの類であろうと思われる。

須恵器では、前述のＳＤ０３関係以外に高台付の壷又は坏となるもの（第16図21）があり、それらの示す年代は、底外面を回転ナデで調整していることから、７Ｃ中葉～８Ｃ前半頃にかけてのものと思われる。又、碗では、底部周辺をヘラ削り調整するもの（第16図25）があり６Ｃ後半までさかのぼりうる可能性がある。他方の碗は、底部が平底に近くなる式のもので、７Ｃ代のものと思われる。坏では、底部を糸切り調整したもの（第15図３）があり、蓋では、凝宝珠を付けるものがあり、いずれも８～９Ｃ代のものであろう。他に、把手部分がある。

甕の破片は、多数出土しているが、時期は確定することが出来ない。ただこの中には、焼きの状態から判断して平安以後の須恵系のものも含まれているようである。

(3) 館跡の年代

このように遺構と遺物をそれぞれの観点から検討してきたが、まだ不明な点が多いとしても館の存立期間に二つの盛期を見出すことが出来る。

すなわち、第一の盛期は７～８Ｃ代である。これは主として須恵器の編年から抽出したものであるが、中世館跡と推定される場所からこうした古代の遺物が出土することは、その頃に古代の館跡が既にあったのか、あるいは遺構としては未確認であるが、付近に官衙跡があったのかというようなことが考えられる。確かにＳＤ０３に見られるように館の濠ＳＤ０２とは方向を異にした時代の違う溝があるのであるから、近隣の地に古代の施設が必らずあったに違いないと思われる。

官衙跡について言えば、本遺跡の西北方 150 ｍの地点に山代郷正倉跡が所在し、出雲国風土記に記載の正倉と一致するといわれる。そしてこの正倉の近隣の地には「山代郷庁」が必らずなくてはならず、旧山陰道に近い本遺跡地を含めて今後検討を要するだろう。

第二の盛期は15Ｃ後半～16Ｃ代である。これは主として輸入陶磁器の示す製作年代からいうのである。この頃ＳＥ０１、ＳＥ０２の井戸や、15Ｃの白磁碗、15Ｃの青磁碗を出土したＳＤ０１がすでに存在している。

特にＳＥ０２内で出土した粉青沙器の破片は日本列島内でも極めて出土例のまれなものであり、館の主人は相当の経済力を持ち合わせた土豪であったと考えられる。

ところで、こうした中世居館跡は近年全国的に調査例が増加しているが、島根県内では少なくわずかに広瀬町の富田城周辺の新宮谷遺跡㉓、塩谷遺跡㉔、飯石郡三刀屋町の京殿遺跡㉕と松江市大庭町の出雲国造館跡推定地㉖が挙げられる。

新宮谷遺跡では、大畑（おおばたけ）地区で２間×３間及び４間×２間の掘立柱建物跡２棟とそれに伴う庭池および土拡１個が検出され、その時期は16世紀後半頃とされ、上級武士の館に推

定されている。

又、惣連場（そうれんば）地区でも２間×３間の掘立柱建物跡１棟が検出され、他に礎石建物跡も確認されている。16世紀中頃から17世紀初頭にかけての上級武士の館跡と推定されている。

塩谷遺跡では、石列、集石遺構、野面積みの石積を伴う溝状遺構、土坑が検出されているが、館を推定させるには至っていない。16世紀初～中葉にかけての尼子氏関連の建物を周辺に想定することが可能であろう。

京殿遺跡では、古殿地区において４間×１間の礎石建物跡１棟が検出され、鎌倉時代後半から南北朝時代頃のものと推定されている。

出雲国造館跡推定地では、推定地西側の水田面下を調査したところ、建物跡はなかったものの、井戸跡が認められ、多量の遺物の示す年代から古墳時代の後期頃から奈良～平安時代末頃あるいは、中世鎌倉期までは付近にかなり強大な勢力の存在が考えられ、それが文献等の上からも併せ考えると出雲国造の館であったことは、ほぼ疑い得ぬところとなっている。

こうした中世考古学の分野の調査は今は少ないが、今後増加の傾向にあると思われ資料の蓄積を待って再検討する時期がくるものと思われる。

いずれにせよ、16世紀前後の中世居館跡の実態がある程度判明したことは、中世の松江周辺の社会状況を考える上で、極めて有意義であると考える。

註

註①　近藤　正「中世土豪関係遺跡」（島根県教育委員会『島根県文化財調査報告第五集』昭和43年10月）

②　島根県教育委員会「昭和57年度風土記の丘地内遺跡発掘調査概要」昭和58年３月

③　近藤　正「出土品」（島根県教育委員会『島根県文化財調査報告第五集』昭和43年10月）

④　門脇俊彦「向山西古墳群調査概報」（松江考古学談話会『松江考古昭和52年のあゆみ創刊号』1978年３月）

⑤　岡崎雄二郎「松江市・井ノ奥第４号墳の調査」（考古学ジャーナルNo. 120　1976年）

⑥　岡崎雄二郎「松江市・石屋古墳の調査」（考古学ジャーナル３月号1979年）

⑦　山本　清「古墳」（島根県教育委員会『島根県文化財調査報告第五集』昭和43年10月）
松江市教育委員会「史跡大庭鶏塚発掘調査報告」1979年

⑧　山本　清「古墳」（島根県教育委員会『島根県文化財調査報告第五集』昭和43年10月）
門脇俊彦「岡田山古墳」（島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年３月）

⑨　⑦に同じ

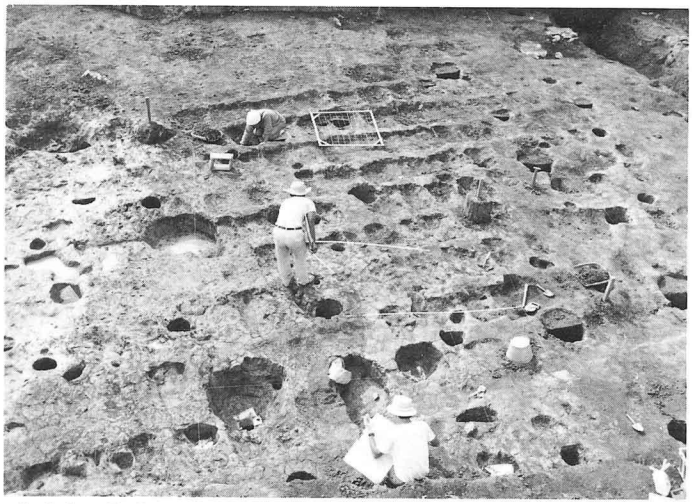
⑩　⑦に同じ

⑪ 島根県教育委員会「岩屋後古墳発掘調査概報」1978年
⑫ ⑦に同じ
⑬ ⑦に同じ
岡崎雄二郎「十王免横穴群」(島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年3月)
⑭ 横山純夫「狐谷横穴群」(島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告第七集』1977年)
⑮ 松江市教育委員会「出雲国庁跡発掘調査概報」1970年
⑯ 地方史研究所「出雲国分寺・国府跡調査報告」(『出雲・隠岐』1963年)
近藤 正「寺跡」(島根県教育委員会『島根県文化財調査報告第五集』昭和43年10月)
前島己基「古代寺院跡」(島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年3月)
⑰ ⑯に同じ
⑱ 島根県教育委員会「団原遺跡発掘調査概報Ⅰ」昭和54年
同 上 「団原遺跡発掘調査概報Ⅱ」昭和55年
⑲ ①に同じ
⑳ ②に同じ
㉑ 小学館「世界陶磁全集19李朝」参照
㉒ 小学館「世界陶磁全集3日本中世」参照
㉓ 広瀬町教育委員会「新宮谷遺跡発掘調査報告書」1982年3月
同 上 「新宮谷遺跡第2次発掘調査概要」1983年3月
㉔ 広瀬町教育委員会「塩冶遺跡発掘調査報告書」1981年3月
㉕ 三刀屋町教育委員会「京殿遺跡調査概報」1979年10月
㉖ 松江市教育委員会「出雲国造館跡発掘調査報告」1980年
他に下記報告書を参考とした。
○広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡」各年次調査概要
○山口市教育委員会「大内氏館跡Ⅰ～Ⅴ大内氏遺跡発掘調査概報1980～1983年」
○広瀬町教育委員会「富田河床遺跡の発掘」1975年
広瀬町教育委員会、富田河床遺跡調査団「富田河床遺跡第2次調査概要」昭和51年
広瀬町教育委員会、富田河床遺跡調査団「富田河床遺跡発掘調査報告」1977年

調査地点（大庭市営住宅）

調査地点（大庭市営住宅）

調査地点遠景（背後は茶臼山）



調査中　Ⅰ区

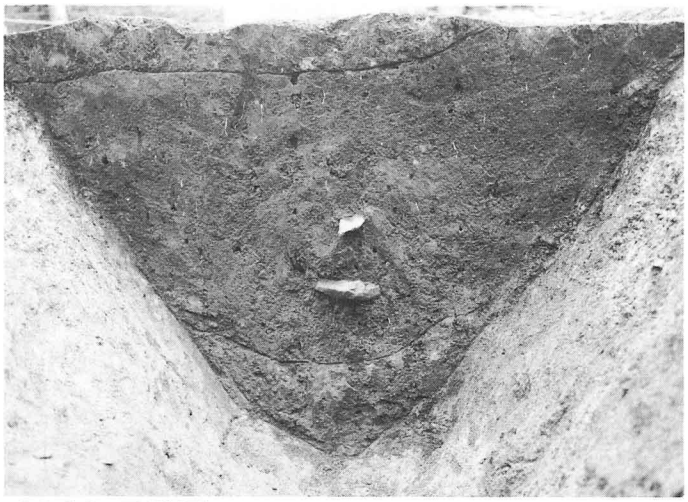
調査中　Ⅱ区

館跡中央部

館跡中央部（背後は茶臼山）

ＳＡ０１、ＳＢ０１

ＳＤ０１西半部（西をみる）

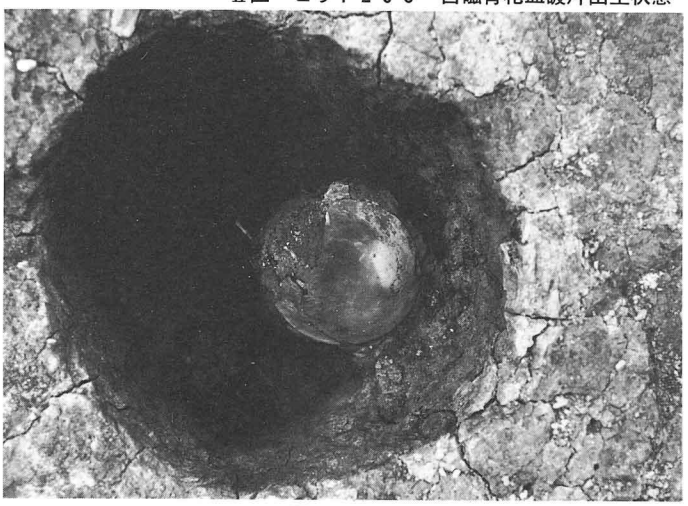


ＳＤ０１　西部断面

ＳＤ０１　土師質土器、磁器片、石出土状態

Ｉ区　ＳＢ０１　落ち込み内土師質土器出土状態

Ⅱ区　ピット２９３　白磁青花皿破片出土状態

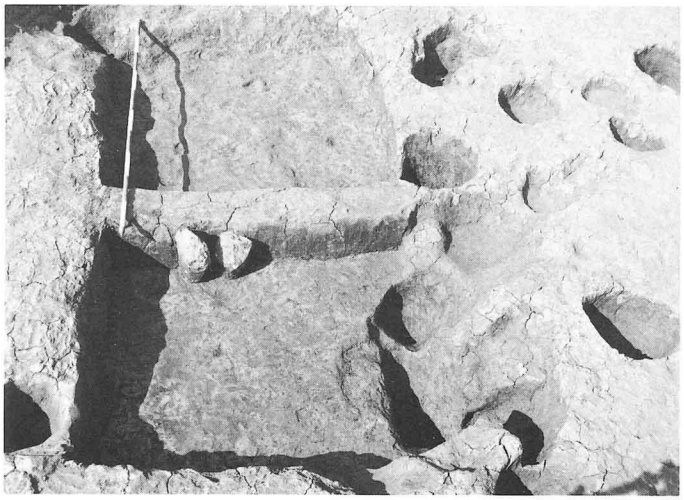


Ⅱ区　ピット４４　土師質土器出土状態

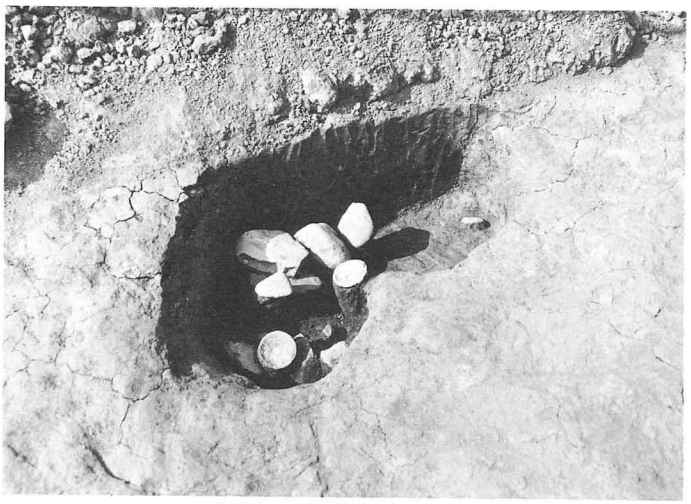
ＳＫ０８と周辺ピット群

Ⅱ区　土坑とピット群検出状況

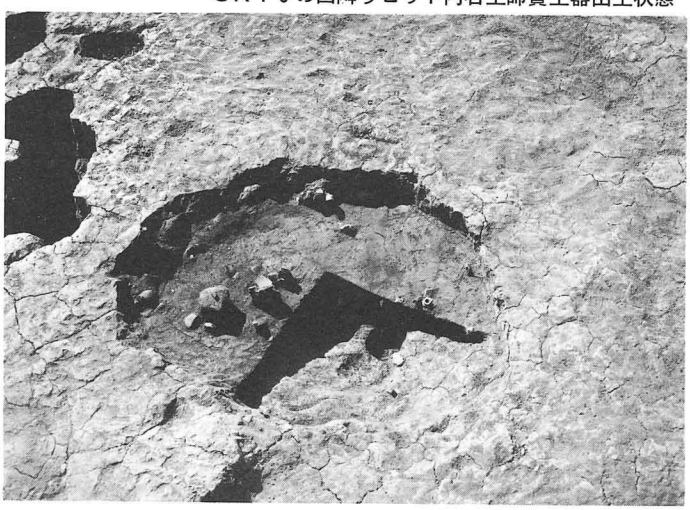
SE02



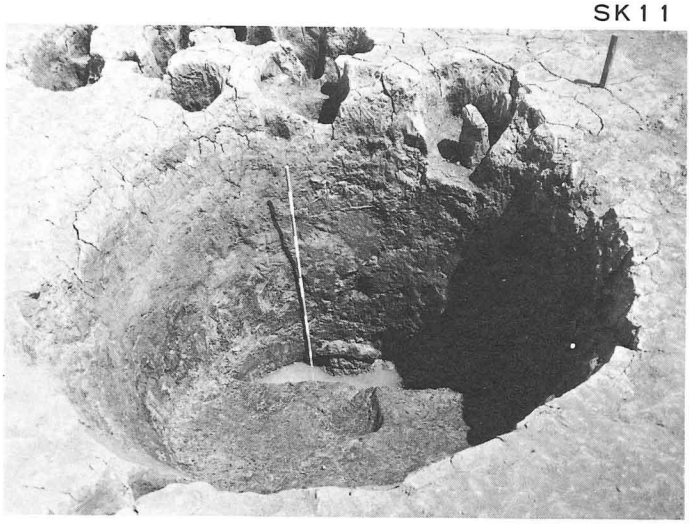
SK19



SK１９の西隣りピット内石土師質土器出土状態



SK１１



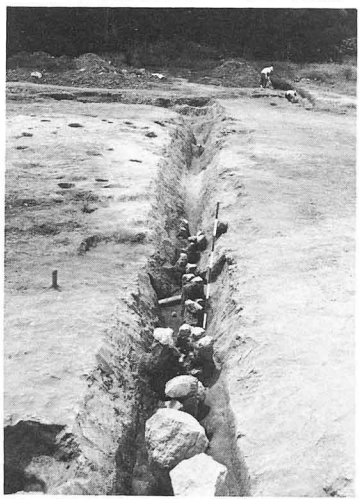
SE０１

SK２７

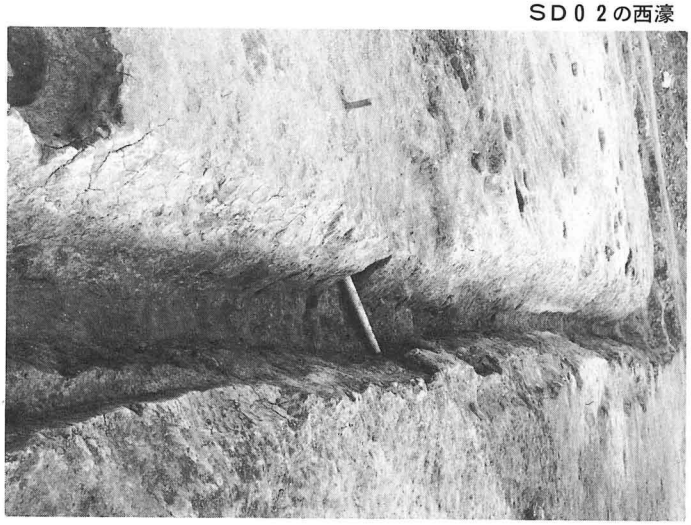
館跡中央部ピット群とＳＤ０２（西濠）

ＳＤ０２の西濠（左手）と南濠（右手）の角部

館跡南半部とＳＤ０２の南濠

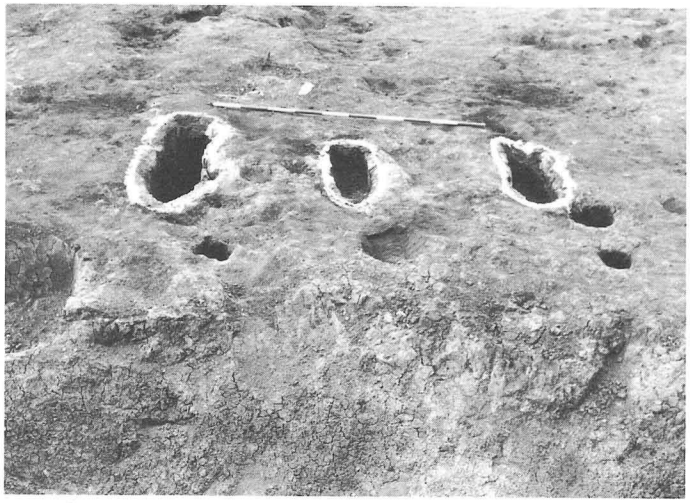


ＳＤ０２の西濠



ＳＤ０２の西濠

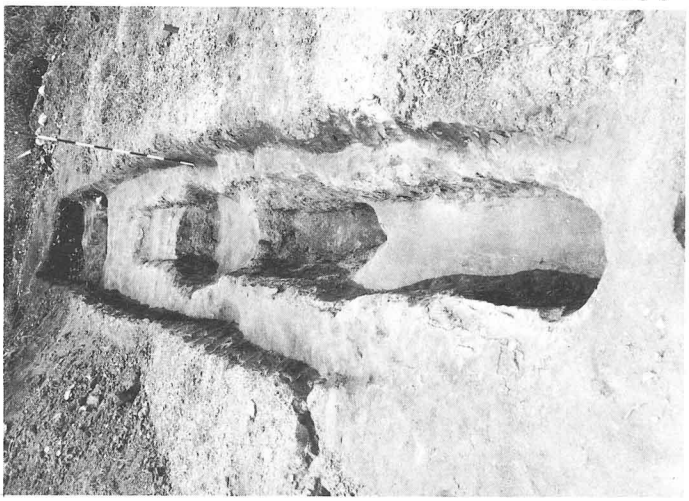
SB05



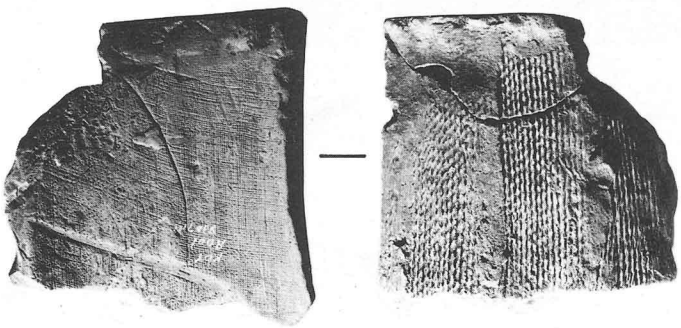
SB06

SB03

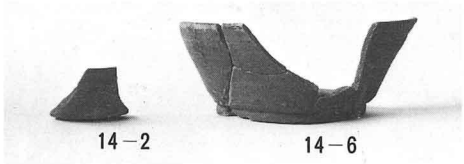
SB03

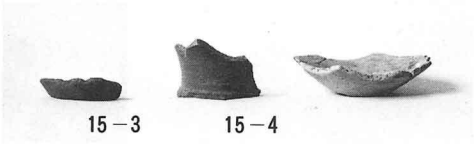


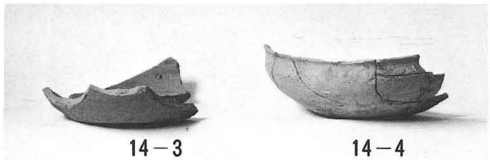
SD05

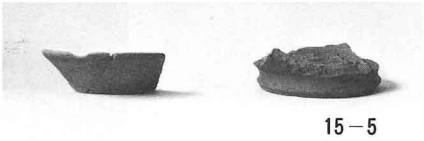


SD01　出土平瓦


14－2
14－6

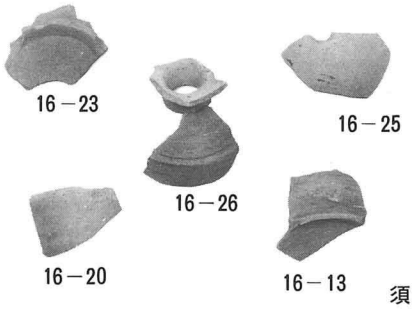

15－3
15－4


14－3
14－4


15－5

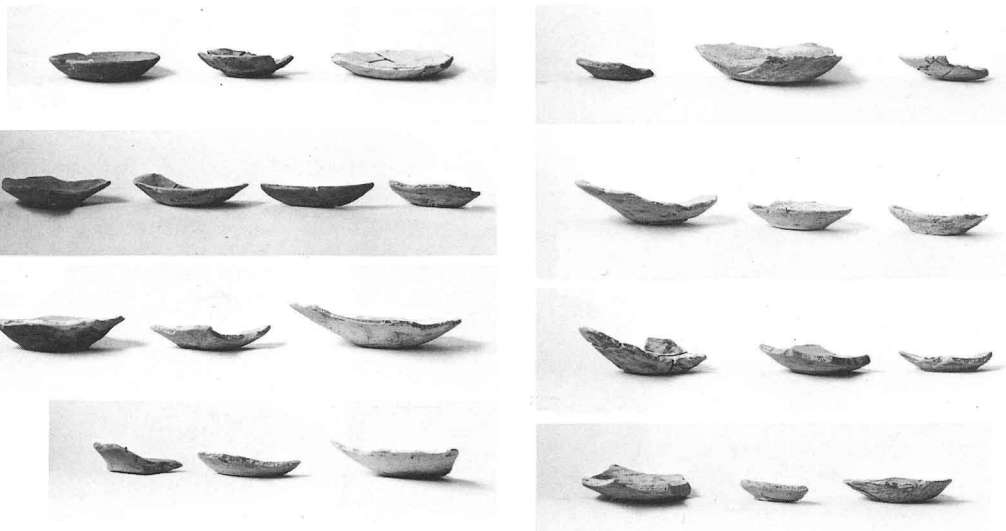
12－11

15－3
底外面

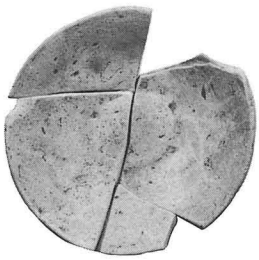

16－23
16－25
16－26
16－20
16－13

12－31

須 恵 器



土 師 質 土 器



13－1

土　師　質　土　器

15－15

土　師　器

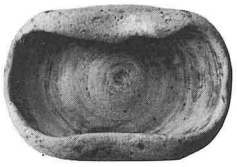
16－9

把　手
16－10

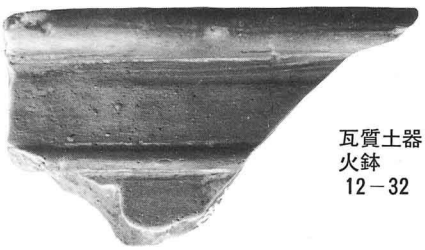
16－18

把　手
16－14

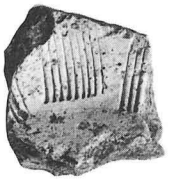
11－15



箸　置
11－17



瓦質土器
火鉢
12－32

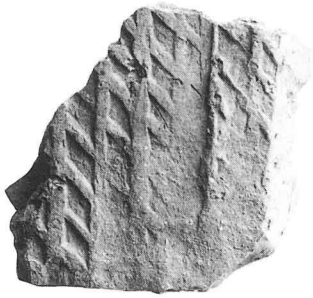


瓦質土器
摺鉢
12－33

瓦質土器
火鉢
12－25

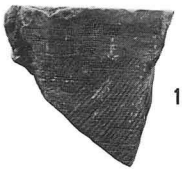
16－33

15－19



16－28

16－31



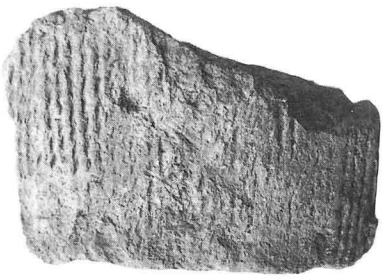
16－30

16－29

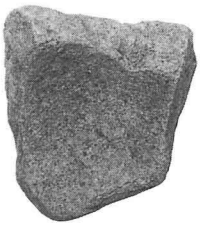
13－13　上面

瓦

15－7



16－32



石　製　品

13－14

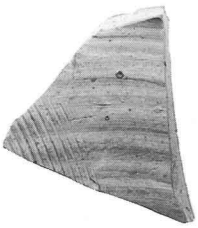
16－7　16－6　天聖元寶

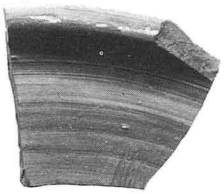
熙寧元寶　皇宋通寶　不　明

開通元寶

唐津系摺鉢

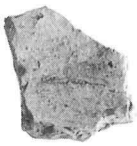
備　前　焼



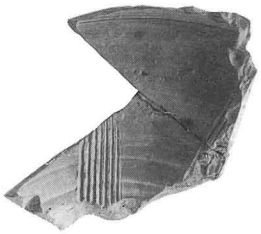


13－9

15－6

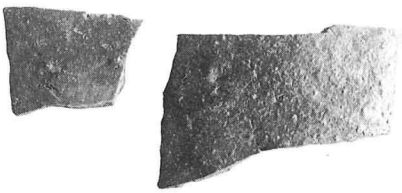


15－2



11－21

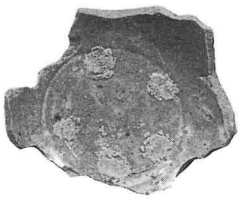
15－1



11－22

19－37

13－4

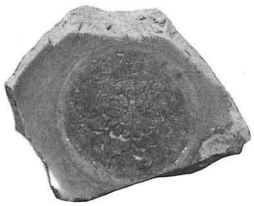


13－3

13－3

13－6

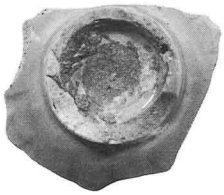
13－7



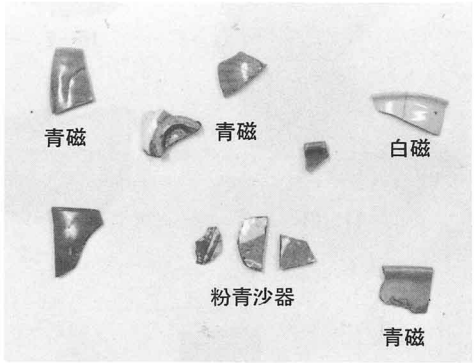
13－2

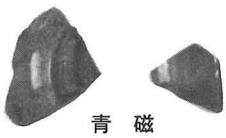
12－19

16－8



13－2



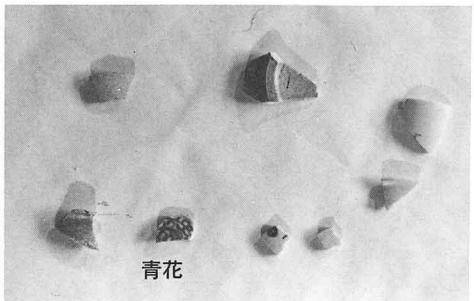


青　磁

白　磁

緑釉碗

青　磁



第　回発掘調査成果図

- 長方形グリッドは昭和57年度県教委調査箇所
- 土塁は昭和37年調査時点のもの

黒　田　館　跡

昭和59年4月

発　行　　松江市土地開発公社
　　松江市教育委員会
印　刷　　㈲谷口印刷
　　松江市母衣町89

019